真・恋姫†無双 ～番長伝～

アニアス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ここは三國志の世界!?しかも武将は全員が女!?だが関係ねぇ！必ず生き延びてやらぁ!!』

不良高校の番長が恋姫の世界でドタバタしながら生きていく話である。

目次

番長、異世界に来るとのこと ―― 1
番長、江東の虎と相見えるとのこと 15
番長、孫堅から追われるとのこと 33
番長、孫堅とタイマンを張るとのこと 54
番長、孫呉の人間になるとのこと 77
番長、孫呉の将たちと交流を深めるとのこと ―― 112
番長、軍議に参加するとのこと ―― 142
番長、初陣を果たすとのこと ―― 159
番長、腹を決めるとのこと ―― 177
番長、親衛隊と組手をするとのこと 192

番長、異世界に来るとのこと

辺り一面に大地が広がる荒野。
植物も少ししか生えておらず木々も枯れているこの場所に1人の青年が仰向け倒れていた。

???「ガァァ、ガァァ・・・」

訂正しよう。
1人の青年がいびきを掻いて寝ていた。
青年の容姿は高校生より背が高く短い金髪。
格好は背中に『怒李威武奈威斗』と刺繍で書かれている紫の特攻服を着ているが前のボタンは閉じておらず黒のインナーが見える。
そしてインナーの下の脇腹には白いサラシを巻いていた。
何故この青年がこんな荒野で呑気に寝ていたのかは誰にも、この青年ですら分からない。

???「んぁ・・・？」

すると、青年が眠りから覚め瞼をゆっくりと開けた。

そして上半身を起こして思いっきり背伸びをした。

???「あぁ～よく寝たなぁ～・・・あ？」

青年が辺りを見渡すと辺りは荒野で自分はここに座っていた。

数秒間青年の思考が停止して、ハッと我に返り咄嗟に立ち上がり改めて辺りを見渡した。

そして次の瞬間、

???「何じゃこりゃあぁぁぁぁぁ!!??」

腹の底から驚きの叫び声を上げた。

ここでこの青年についての説明をしておこう。

青年の名前は雪村京馬《ゆきむらきょうま》。

神奈川県にある不良高校、早乙女高校の2年生で番長を名乗っている。

暴走族『怒李威武奈威斗《ドリームナイト》』というチームを作りよく他校の不良高とよく喧嘩を繰り広げていた。

京馬「待て待て待て！落ち着け俺！一体何が起こってんだ!?確か昨日はチームの全員でゲーセンで遊んで家帰ってメシ食ってすぐに部屋で寝てたよな!?なんでこんなところにいるんだ俺!?そもそもここ何処だよ!?」

京馬は焦りながらも昨日の出来事を思い出しながら何故自分がこんなところにいるのか考えたがまったく分からなかった。

京馬「これは夢か・・・!?それともテレビのドッキリ・・・!?いやテレビのドッキリにしても大掛かりすぎるし、それに夢にしてもリアルすぎる・・・!」

考えれば考える程ますます分からなかった。

そんな時、あることが京馬の脳裏をよぎった。

チームに漫画好きのメンバーが居るのだが、同じジャンルの漫画がかなり好きで京馬もよく読んでいた。

そのジャンルは、

京馬「まさか・・・異世界に来ちまったのか・・・?」

京馬は咄嗟に思い浮かんだワードを口に出した。

異世界にやって来た主人公の漫画を読んだ京馬にはこれしか考えられなかった。

京馬「・・・イヤイヤイヤイヤ！あり得ねぇよ！何言ってんだよ俺!?漫画の読みすぎだろ!?」

しかし冷静になって考えてそんな非現実的な出来事があるはずがないと断言した。

何の証拠もないのにそんな筈はないと何度も自分の心に言い聞かせた。

???「おい、そこのお前」

すると後ろから野太い声が聞こえてきたため京馬が振り向くと黄色いバンダナを頭に巻いた３人組が立っていた。

１人目は無精髭を生やした４０代前半の男。

２人目は子供くらい背が低い小柄な男。

３人目は図体がとても大きい肥満体の男。

体型も年齢もバラバラな３人組だが、共通点があった。

まず目付きや雰囲気が悪人のようで腰に剣を下げている。

そして極めつけはまるでテレビの時代劇ドラマで見るような山賊の格好をしている。

３人組を見て京馬は思った。

京馬（・・・これ異世界転生じゃなくて、タイムスリップじゃね？）

京馬はどうしたものかと考えるが取り敢えず情報を聞き出そうと3人組に話しかけた。

京馬「ええっと・・・？俺になんか用ッスか？」

髭の男「おめぇ中々珍しい格好してんな？俺たちちょっと金に困ってんだよ。なぁチビ、デブ」

小柄な男「アニキ！こいつの持ち物と身ぐるみ剥がしてしまいましょうぜ！」

肥満体の男「そ、それがいいんだな」

アニキと呼ばれた髭の男はチビとデブと呼んだ2人と一緒にニヤニヤと笑いながら京馬に詰めよっていた。

京馬はすぐにこいつらが自分から身ぐるみを剥がそうとしていると理解した。

京馬「やめたほうがいいッスよ。俺金目の物なんて何にも持ってないんで」

アニキ「おいおい、俺たちを馬鹿にすんなよ？」

チビ「そんな嘘がばれねぇとでも思ってんのか!?やっちまえデブ！」

デブ「おう、大人しくするんだな」

京馬は本当のことしか言っていないのだが、3人組はその言葉を信じず京馬から身ぐるみを剥がそうとした。

そしてデブが京馬の特攻服を掴もうと手を伸ばすと、

ガシッ

デブ「んぉ・・・？」

京馬がデブの手首を掴んだ。
デブはすぐに京馬の腕を振り払おうとするがまるで固定させたかのように振り払えずそれどころか、
ググググッ
デブ「ぐぁぁぁぁ!?」
京馬の掴む力に苦痛の声を上げて膝をついてしまう。
アニキ「デ、デブ!?」
チビ「どうした!?」
見ていたアニキとチビも何が起きているか分からなかった。
デブの手首を掴んでいた京馬は、

京馬「テメェの汗まみれのきたねぇ手でこれに触ろうとすんじゃねぇよ・・・！」

声のトーンを低くして目付きを鋭くしてデブを睨んでいた。

京馬の着ている特攻服は怒李威武奈威斗の結成時に作ったもので、言わば京馬の誇りと魂の結晶である。

その特攻服に勝手に触ろうとしたデブに京馬は怒りが込み上げてきた。

京馬は右拳を振りかざし、

京馬「取り敢えずくたばってろ！」

ズドンッ!!

デブ「ぐはぁ!?」

思いっきりデブの顔面にぶちこんだ。

デブは殴られた反動で数メートル後方へ吹き飛んだ。

チビ「テ、テメェ！よくもデブを！」（ジャキン

仲間のデブがやられたことに怒ったチビは腰の剣を抜いて京馬に斬りかかった。

ヒョイッ

しかし、京馬は簡単に剣を避けて、

京馬「おせぇよ」

ズバンッ!!

チビ「グヘッ!?」

チビの顎目掛けて蹴りを繰り出しぶっ飛ばした。

喧嘩慣れしている京馬にとってはデブのような体格の相手とやり合っているためこ

の程度は大したことはない。
チビが剣を抜いた時は京馬も流石に不味いと思ったが振り下ろしが遅かったため
あっさり避けることができた。

アニキ「チビ・・・!?デブ・・・!?」

チビとデブがやられたことによりアニキはガタガタと震えて後悔してしまった。
自分は狙う相手を間違えてしまったと。

京馬「おい髭」

アニキ「は、はいっ!?」

完全に立場が逆転してまったアニキは京馬の呼び掛けにかしこまってしまった。

京馬「俺の質問に答えろ。この近くに街か集落はあるか?」

こいつらから情報を聞き出しても録な情報しか得られなさそうと判断した京馬は近くの街へ行き情報収集をしようとした。

アニキ「そ、それなら！この先を行くと街がありまっせ！孫堅が治めてる街でさぁ！」

京馬「・・・孫、堅？」

アニキの口から出た人物に京馬は唖然となってしまった。

孫堅と言えば三國志に出てくる武人の1人で『江東の虎』と呼ばれた猛者である。

京馬「ということはここは、三國志の時代ってことかよ・・・!?」

自分が今置かれている状況がとんでもないことだと理解した京馬は焦りを顔に出してしまう。

京馬「ん？あっ・・・!?」

京馬が我に返るといつの間にか3人組が居なくなっていた。

京馬「逃げたか・・・まぁいいか、街の場所を聞き出せただけでもよしとするか・・・お?」

取り逃がしたことをどうでもいいかと口から溢すと袋が落ちていることに気がついた。

おそらくさっきの3人組が落として行ったのだろう。

何か入っていないかと京馬が袋の中を確認すると、中にはなんと金貨やら宝石などの財宝がザクザク入っていた。

京馬「アイツら結構持ってんじゃねぇか・・・!」

こんなに財宝を持っていたにも関わらず欲張って自分からも金目の物を奪おうとした3人組に京馬はますます怒りが汲み上げてきた。

京馬「って、怒ってても何も始まんねぇよな・・・うし!じゃあ行くか!」

京馬は財宝が入った袋を担いでアニキが教えてくれた方向へ歩き出した。
これは後に、この時代に大きな影響をもたらさんとする男の始まりの話である。

番長、江東の虎と相見えるとのこと

京馬「はぁ～、やっと着いたぁ～」

髭が教えてくれた方角を歩いて2時間、京馬はやっと街にたどり着くことができた。
あれから休むことなく歩き続けたため京馬はかなり疲れていた。
京馬が着いた街の様子は通りは人で溢れており、商売をしている店も多くある。
街の住人の衣服も昔の中国人が着ているような服装をしていた。
そして街を見下ろすかのように大きな屋敷が建っていた。

京馬「ひと休みしたいところだが、取り敢えず聞き込みが先だな。もしかしたら元の時代へ帰る方法もあるかもしれねぇし」

京馬はこの時代の現状を把握するために街の人たちから情報収集を始めた。

―――――――――――――――――――――――――――

数十分後、一通り聞き込みを終えた京馬は大通りを歩きながら集めた情報を整理していた。

今の時系列は１８４年、つまり後漢末期。

そしてこの国は荊州。

現在は袁術が治めているが噂ではとんでもないワガママ暴君だとか。

孫堅は袁術の配下につき日々戦に駆り出されている。

最近では黄巾党と呼ばれている連中が暴れて各地で多くの血が流れている。

京馬「つまり今は黄巾の乱の真っ最中ってわけか・・・」

京馬がこれからこの時代で自分はどうやって生きていこうかと悩んでいると、

ぐうううう～・・・

京馬の腹から空腹の音が鳴ってしまった。

京馬「・・・今は腹ごしらえだな」

先程からなにも口にしていない京馬はキョロキョロと見渡すといかにも飲食店のような店を見つけて中へ入って行った。

中へ入ると京馬と同じように空腹の客たちが席について餃子や炒飯、青椒肉絲などの中華料理を頬張っていた。

それを見て京馬の空腹がさらに増してきた。

空いている席に京馬が座ると、

店員「いらっしゃいませ～！お決まりでしょうか～？」

可愛らしい女性店員が笑顔で京馬に話しかけてきた。

京馬は何を食べようかと考えるがとにかく腹ペコのためたくさん食べたいと思い、

京馬「じゃあこの店の全品を一品ずつ持って来てくれ」

店の全メニューを注文した。

京馬の注文に店員は固まり周りの客も京馬の方を振り向いてしまった。

店員「・・・えぇ～っと、失礼ですけど・・・お金持ってますか・・・？」

店員は京馬が店の料理全品分の代金があるのかと伺った。

店員の半信半疑の目を見て京馬は盗賊たちが落としていった袋を机の上にドン！と置き中を見せた。

中にはたくさんの財宝が入っており黄金の輝きを発していた。

店員は唖然となり周りの客たちも箸を止めて財宝に見とれてしまった。

京馬「これで足りるか？」

店員「は、はいっ！少々お待ち下さいっ！」

店員は慌てた素振りで厨房へ駆け込んで行き京馬は料理が来るのを静かに待つことにした。

――――――――――――――――――――

ガツガツガツガツバクバクバクバク!!

しばらくして料理が次々と京馬の机の上に置かれていった。
焼売を始め、回鍋肉に担々麺、鶏の丸焼きなどの料理で机が埋めつくされた。
とにかく腹ペコだった京馬は一心不乱に料理を胃袋の中へ入れていった。
そして瞬く間に空の皿が積み重なっていった。
料理がきては皿が空になり、またきては空になりとその繰り返しだった。
もはや厨房は火の車の大忙しの状況だった。
客たちも京馬の底なしの食欲に唖然となってしまう。
そして京馬は最後の一品を口に運び、

京馬「ふぅ～！食った食ったぁ～！」

店の全品の料理を完食して少し膨れた腹をさすった。

京馬の机は空の皿が積み重なり天井まで届きそうなくらいになっていた。

店員「すごい食べっぷりでしたね・・・！」

店員も積み重なった皿を見て京馬の食欲に感心してしまった。

京馬「じゃあ勘定を頼む・・・」

店員「は、はいっ。では失礼します」

店員は袋の中に手を伸ばして財宝を篭の中へ移していった。

ジャラジャラと財宝の音が店内に響き渡っていた。

店員「では確かに、代金分はいただきました」

しばらくして、店員が代金分だけ財宝を入れ終えた。
袋に入っていた財宝はまだ半分以上もあり京馬の所持金にはまだまだ余裕があった。
これなら宿で何泊かはできるだろうと思った。

京馬「んじゃあ、次は宿を取るか・・・」

椅子から立ち上がり店の出入口へと歩いて行った。

店員「ありがとうございましたー!」

店員に見送られながら京馬は振り向かず右腕を上げて返答をした。
京馬が店から大通りへ出ると、

「おい、ちょっといいか?」

突然男数人が京馬を取り囲み逃がさないようにした。
京馬は少し驚いてしまい、周りの人たちも京馬と男たちから距離を置き出した。
男たちは見るからにごろつきでニヤニヤと笑いながら京馬に話しかけた。

「さっきの見てたぜ?あんた随分財宝を持ってるそうじゃねぇか。そんなにたくさん使い切れねぇだろ?勿体ねぇから俺らに全部寄越しな」

おそらく頭であろう男は京馬が担いでいる袋を見ながら財宝を全てくれと恐喝しだした。
京馬はため息をついて呆れた視線をごろつきたちに向けた。
この時代は結構治安が悪いなぁ～と思った。

京馬「お前らに渡すものなんざねぇよ。渡すくらいなら豚の餌にでも混ぜた方がマシだ」

京馬は頬を上げながらゴロツキたちに挑発をかました。
喧嘩が日常茶飯事の京馬にとってはこの程度の恐喝など大したものではない。

ゴロツキの頭は京馬の挑発に乗ってしまい、

「・・・つべこべ言ってねぇでさっさと寄越せ！」

京馬の顔目掛けて拳を繰り出した。

きゃぁぁ！と周りの人たちが悲鳴を上げたと同時に、

パシッ!!

京馬はいとも簡単にゴロツキの拳を左手で受け止めた。

ゴロツキ「なっ・・・!?このっ・・・!?」

ゴロツキは拳を引こうとするも力が強すぎるためピクリとも動かなかった。

そして京馬は右拳をつくり、

京馬「おらぁっ!!」

ドンッ!!

ゴロツキの脇腹に思いっきりねじ込んだ。

ゴロツキ「がぁっ・・・!?あ、あぁ・・・!?」

ゴロツキの鳩尾に拳が当たったためそのままバタリとうつ伏せに倒れてしまった。
仲間たちも頭がやられたことに激しく動揺してしまう。

京馬「まだやるか・・・？」

京馬は他の連中を鋭く睨み今すぐ全員殴ってやろうかという圧力が掛かっていた。

「すっ、すいませんでしたー!!」

「俺たちが悪かったー!!」

京馬に対して恐怖が沸き上がってきたゴロツキたちは気絶している頭を担いで逃げていった。

京馬「・・・はぁ、だらしねぇ連中だなぁ」

ゴロツキたちの情けなさに京馬は呆れてしまい周りの人たちの視線を気にせず宿を探そうとした。

???「中々やるじゃねぇかお前!!」

すると後ろから女性の大きな声が聞こえてきて京馬は振り向いた。
そこには周りの人たちを押し退けながら1人の女性が京馬の元へ歩いて来ていた。
女性は京馬よりも背が高く褐色の肌で背中まで伸ばした桃色の髪を持ち合わせ頭には高い地位の人が被りそうな帽子を乗せていた。
服装は赤を基準とした服を着こなしその下から豊満な胸が押し上げていた。
さらに腰には鮮やかな装飾が施されている剣を下げていた。
京馬は女性の様子を見て冷や汗を掻いていた。

京馬（何だあの人・・・!?言葉に表せねぇくらいの威圧じゃねぇか・・・!?今まで喧嘩してきた連中とは比べものになんねぇ・・・!!）

女性がギラギラと放つ視線はまさに獲物を狙い定めた獣の目だった。
京馬が呆気に取られていると、

「孫堅様だ!」

「孫文台様よ!」

周りの人たちは女性を見てワイワイと騒いでいた。

京馬「・・・は?孫、堅?」

京馬は周りの人たちの声を聞いてポカンとなってしまう。
人たちは女性のことを孫堅と呼んでいた。
確かに孫堅と聞こえた。

京馬（まさか・・・この人・・・!!）

そして女性は京馬の目の前まで来て見下ろした。

???「何だか騒がしいかと思って来てみりゃあいい面構えの若造がいるじゃねぇか・・・！」

女性はニヤリと笑いながら京馬を視界から外さないように見ていた。

京馬はまさかと思い恐る恐る女性に話しかけた。

京馬「えっと・・・もしかしてですけど・・・あ、あんたまさか・・・『江東の虎』の孫堅、ですか・・・？」

孫堅「おう！オレが孫文台だ！」

京馬の質問に女性、孫堅は堂々と答えた。

京馬の思考は止まってしまい次の瞬間、

京馬「・・・はぁぁぁぁぁ!!??孫堅が女ぁぁぁぁぁ!!??」

今日一番の驚きの声を上げた。

起きたら荒野にいたこと盗賊に襲われたことよりも三國志の名高い武将が女であることが信じられなかった。

孫堅「なんだ?オレが女じゃわりぃのかぁ?」

自分が女だと驚いている京馬に、孫堅の眉間にはシワができていた。

京馬は自分がとてつもなく失礼なことを言ってしまったと焦ってしまい慌てて孫堅に謝った。

京馬「あっ・・・!すっ、すんませんっ!江東の虎って風の噂で聞いてたもんですから!てっきり勇ましい男かと・・・!」

自分の素性を明かさないように上手く誤魔化してこの場を乗りきろうとした。

孫堅「・・・まぁいいさ」

孫堅は軽く笑って京馬の失言を許した。

京馬は孫堅の顔を見てホッと安心した。

京馬（にしても孫堅が女って一体どういうことなんだ?タイムスリップして過去に飛ばされたかと思ったんだが・・・やっぱここは異世界・・・?）

京馬は自分がタイムスリップしたのか異世界へ飛ばされたのかまったく分からなかった。

そんな京馬をよそに孫堅は話しを進めた。

孫堅「さっきの見てたぜ。拳一発で仕留めるたぁやるじゃねぇか」

京馬「・・・あの程度の連中に嘗められたら終わりなんで」

孫堅「・・・ハッハッハッ！確かにそうだな！」

京馬の返答に孫堅は豪快に高笑いをした。
女の身でありながら男のように豪快な人だと思った。

孫堅「おい、名前は何て言うんだ？」

京馬「俺は、雪村京馬って言います」

孫堅「そうか、京馬って言うのか・・・」

京馬の名前を聞いて孫堅の目がさらにギラギラとなり何かを決めたような顔になっ

ていた。

孫堅「よぉし京馬！気に入ったぞ！今日からこのオレに仕えろ!!」

京馬「・・・・・・はい？」

孫堅の上から目線の発言に京馬は再びポカンとなってしまった。
これが別の世界から来た番長と江東の虎の出会った瞬間だった。

番長、孫堅から追われるとのこと

京馬「お断りです」

いきなり孫堅からスカウトされた京馬。
しかしきっぱりと誘いを断った。

孫堅「何だぁ？オレの誘いを断るってのか？」

孫堅は京馬が断ったことに睨みをきかせながら威圧をかけていった。
周りの見ている人たちも孫堅が放つ威圧に身震いしてしまう。
京馬は一瞬威圧に呑まれるも冷静になり孫堅と向き合った。

京馬「じゃあ逆に聞きますけど、あんたはいきなり目の前に現れた奴にいきなり『仕

えろ!』って言われたらどうします?」

孫堅「あぁ?んなもんそいつをぶん殴るにきまってんだろ」

京馬「・・・つまりそういうことです」

いきなり現れた見ず知らずの相手に従う程、京馬は尻の軽い男ではない。

何度か怒李威武奈威斗から京馬を出し抜こうと他のチームから誘われたが、京馬は自身のチームを裏切らず返り討ちにしてきた。

いくら目の前にいる人物が江東の虎だろうとそう易々と配下につくわけにはいかない。

京馬「それに俺は誰かの下につくなんざまっぴらごめんなんで・・・そんじゃ俺はこれで」

京馬はこの場を離れるために孫堅の横を通りすぎようとするが、即座に孫堅が道を塞いで通さないようにした。

孫堅「んなことなんざぁ知るか。お前は大人しくこのオレに仕えときゃあいいんだよ」

孫堅のあまりにも自己中心的で上から目線な態度に京馬の怒りがグツグツと煮えたぎってきた。

京馬「・・・袁術なんかよりも孫堅の方がワガママ暴君じゃねぇか」

京馬は孫堅に睨みをきかして担いでいた袋をドサッと地面に置いた。

孫堅は京馬が自分に殴りかかってくると思いニヤリと笑い身構えた。

周りの人たちも京馬と孫堅がここで喧嘩をおっぱじめるのではないかとザワザワと騒ぎ始めた。

両者が睨み合う中、京馬は、

京馬「こうなったら仕方ねぇ・・・・・・

逃げるが勝ち戦法だぁーーーー!!!!!」

（ダダダッ!!

なんと孫堅に背を向けて逃げ出した。

孫堅はおろか、周りの人たちも京馬の行動に唖然となってしまった。

不良の番長としてなんとも情けないことかもしれないが、こっちが圧倒的に不利に陥った状況では不良の世界でも必ずある作戦である。

京馬（江東の虎と呼ばれた武将なんかとやり合ったら命の保証なんざねぇ!!このまま逃げ切ってやらぁ!!）

京馬は走りながら後ろから孫堅が追いかけて来ていないかと首だけ後ろへ向けると、

孫堅「逃がすかぁーーーーーーーーー!!!!!」

（ドドドドッ!!

なんと孫堅が好戦的な笑みを顔に出しながら京馬のあとを追いかけて来ていた。

京馬「マジかよッ!?」

京馬はある程度距離が離れて孫堅は自分を見失ったかと思っていたが、まさか振り切れていなかったことに驚いたと同時に孫堅の顔を見てまさに鬼が追いかけて来ている

と連想してしまいとてつもない恐怖に呑まれかけていた。
捕まったら何をされるか分からないと。
京馬「チキショーーーーー!!ゼッテー逃げ切ってやらぁ!!」(ダダダダダダッ!!
孫堅「はははははっ!!このオレから逃げられると思うんじゃねぇぞぉ!!」(ドドドドドドッ!!
京馬と孫堅は住人たちを巻き込みながら鬼ごっこを繰り広げた。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

あれから日が落ち始め辺りも暗くなっている中、
京馬「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

人目につかない路地裏で京馬が壁にもたれながら座り込んで息を整えていた。
顔は明らかに疲労の表情でびっしりと汗を掻いていた。
孫堅から休まず逃げ続け先程やっと振り切ることができたため体を休めていた。
京馬「何なんだよ、あの人・・・!?しつけぇったりゃありゃしねぇ・・・！」
京馬は孫堅の執念強さに恐れいるもののなんとか撒くことができたため取り敢えずひと安心していた。
しかし財宝を落としてしまったためこれでは宿で休むことができずにいた。
京馬「仕方ねぇ、こうなったら野宿するしかねぇな・・・」
特効コートを脱いで毛布のように掛けて京馬は疲労に呑まれて深い眠りについた。

――――――――――――――――

チュンチュン、チュン・・・

京馬「んん・・・？」

翌朝、鳥の鳴き声と日の光で京馬は目を覚ました。

立ち上がって思いっきり背伸びをして特効コートを羽織った。

路地裏から顔を出して大通りに孫堅がいないかとキョロキョロと見渡すも何処にも孫堅の姿が見えず安心して大通りへ出た。

京馬「この街に滞在するのは危険だ・・・孫堅に見つかる前に出ねぇと」

また追われるのはごめんのため、京馬は一刻も早くこの街を出ようと門の方へ歩き出した。

人混みに紛れながら簡単に孫堅に見つからないように歩いていた。

そしてようやく門が見えた時だった。

京馬「！・・・」（ピタッ

京馬は急に歩みを辞めて立ち止まった。

何故なら京馬の5メートル先に女性が立っていたからだ。

女性の見た目は京馬より年上。

薄い青色の長い髪に赤い紐の髪止めをつけているのが特徴で孫堅と同じように赤を基準とした服を着こなしていた。

どこかおしとやかで年上のお姉さんの雰囲気が漂っていた。

女性はまるで京馬を待っていたかのように立っていたため、京馬の危機能力が働き立ち止まったのである。

???「・・・ちょっといいかな？」

女性は京馬の前へ歩いてフレンドリーに話しかけた。

京馬は昨日のことがあるため女性に対して警戒を高めてしまう。

京馬「・・・俺に何か用ッスか？」

???「少し確認で聞くけど、雪村京馬くん、だよね・・・？」

女性が自分の名前を知っていることに京馬はあることを確信してしまった。

この人は孫堅の配下の人だと。

京馬「あんた、孫堅さんのとこの人か・・・？」

程普「そっ、程普よ。字は徳謀。この街の警備隊の統括を任されてるわ」

女性、程普は笑顔で京馬に自身の名前を名乗った。

またしても三國志の武将が女であることに京馬は驚いてしまうが、それはもう通り越してしまい呆れながら程普に自分に何か用があるのかと尋ねた。

京馬「それで？その程普さんが俺に何かご用で？」

程普「とぼけちゃって。本当は分かってるくせに」

程普は興味深く京馬をジロジロと見てからかうかのように笑っていた。

京馬「・・・孫堅さんの命令で、俺を捕まえに来たのか？」

京馬は警戒を高めながら程普を睨みやるなら出るとこ出るぞと言わんばかりだった。

しかし程普は、

程普「違う違う、別にそんなつもりじゃないよ」

手を胸元辺りで降って敵対の意思はないことを示した。

京馬は程普の様子を見て取り敢えず信用して警戒を解いた。

京馬「じゃあもう孫堅さんは俺のこと諦めてくれたのか・・・？」

程普「ううん、全然諦めてないよ」

微かな期待をしていたが程普はサクッと否定をした。
分かりきっていたことだが、京馬はガクッと肩を落としてしまう。
程普「私は大殿からある命を受けてるの。『金髪で紫の羽織を着た小僧をこの街から絶対に出すな』ってね」
京馬「・・・警備隊って暇なのか？」
程普「暇じゃないよ。街の警羅とか色々やらなきゃいけないんだけどねぇ～」
京馬「だったら俺なんかに構ってねぇでそっちを優先しろよ・・・」
自分を捕まえるために警備隊を動員させるなんて孫堅は何を考えているのだろうと京馬は頭を抱えてしまう。
程普「ある程度の話は聞いてるよ・・・もう諦めたら？大殿に目をつけられたら例え

地獄の果てだろうとどこまでも追いかけてくるよ」

京馬「・・・孫堅さんにも言ったが、俺は誰かの下につくなんざまっぴらごめんだ。とことんまで逃げ切ってやる」

程普「ふ～ん？じゃあ今の内に逃げた方がいいんじゃない？」（スッ

そう言いながら程普は京馬の後ろの方を指さした。

京馬はまさか!?と思い後ろを振り向くと、

孫堅「見つけたぞぉーーーー!!!!!」（ドドドドッ!!

向こうから孫堅が土埃を上げながら京馬の方へ向かって来ていた。

京馬「来やがった!!あの人も暇なのか!?」

程普「まぁ頑張れるところまで頑張ってみたら?」

程普はこの状況を楽しむかのように笑っており京馬は早く逃げなければと即座に行動を起こした。

バッ!!

家の方へ駆け出して飛び上がり屋根へと上がっていった。
そしてカラカラと音を立てながら屋根の上を走って行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

数時間後、

京馬「はぁ～・・・また無駄な体力使っちまった・・・」

再び孫堅を撒くことができた京馬はヨロヨロと大通りを歩いていた。

今朝から何も口にしていない京馬は腹ペコで何でもいいから胃袋に入れたい気分だった。

そんな時、

???「あっ！すいません！少しよろしいでしょうか？」

京馬「んぁ・・・？」

声をかけられて京馬が振り向くと、そこには茶髪のツインテールに青い服を着た少女が心配そうな表情で京馬の様子を見ていた。

京馬はその少女に見覚えがあった。

何故なら、

京馬「あんたは・・・確か店にいた・・・」

そう、昨日京馬が昼食を取った店にいた店員だったからだ。

店員「やっぱり！昨日お店に来て下さったお客様ですよね？・・・どうしたのですか？随分お疲れのようですが・・・」

京馬「あ、あぁ・・・まぁ色々あってな」

京馬は疲れを隠しきれずとも店員と笑顔で話をした。

何かを察した店員は、

店員「お疲れのようですしお店でお休み下さい。さっ、こちらへ」

京馬の手を取り店へと連れて行った。

店へ入ると昨日同様に客が来ており、店員は京馬を空いている席へと座らせた。

店員「様子を見た限りだど、朝から何も召し上がってませんよね？駄目ですよ？ちゃんと食べないと」

京馬「・・・金落としちまったんだから何も買えねぇんだよ」

京馬は金欠の文無しのため食べ物を買うことができずの状態だった。

それを聞いた店員は、

店員「・・・少し待ってて下さい」

厨房の方へと入って行った。

しばらくすると、

店員「お待たせしましたー」

厨房から出てきた店員が笑顔で担々麺を持って京馬の机に置いた。
京馬は店員が担々麺を持ってきたことに呆然となってしまう。

京馬「・・・俺、金持ってねぇぞ?」

店員「これは昨日のお礼です。代金は結構ですので気にしないで下さい」

京馬「お礼・・・?」

昨日は何か彼女にメリットがあることをしただろうか?と京馬は考えるもまったく心当たりがなかった。

店員「・・・ガラの悪い方たちを倒したではありませんか」

京馬「え?・・・あぁー・・・」

店員の言う通り、確かに昨日自分はゴロツキたちを倒したがそれと何の関係があるの

か分からなかった。

店員「あの人たちには本当に困ってたんです・・・いつも私に日々絡んでいた時にあなたが現れて、それ以来、店に来ることもなくなりましたので」

京馬「・・・本当にいいのか？」

店員「はいっ！」

店員の気持ちを無駄にするわけにもいかず、京馬は担々麺に食らいついた。

ズルズルと大きな音を立てながら担々麺を啜っていき京馬の胃袋は満たされていった。

店員「昨日もそうでしたけどいい食べっぷりですねぇ。それにしてもどうして孫堅様から追われているのですか・・・？」

京馬「・・・仕えろ仕えろってしつこくてな。いい迷惑だ」

店員「あはは・・・なんとなく分かりますよ。孫堅様は一度言ったら必ず成し遂げるお方ですから」

京馬の話を聞いて店員も思わず苦笑いを浮かべてしまう。

京馬「とにかく、俺はこんなところで道草食ってるわけにはいかねぇんだ・・・俺には、帰らなきゃならねぇ場所がある・・・」

孫堅から追われようとも京馬は絶対に元の世界へ帰らなければならない。

家族に友人、何より怒李威武奈威斗のチームのみんなが京馬の帰りを待っているのだから。

店員「で、ですけど、どうなさるおつもりですか?このままだと、孫堅様に捕まるのは、時間の問題ですよ・・・?」

京馬「・・・もう逃げるのはやめだ」

店員「えっ・・・？」

ということは大人しく孫堅に捕まることを決めたのかと店員は目を丸くしてしまうが、京馬が易々と捕まるとも思えなかった。

京馬は担々麺を食べ終えて椅子から立ち上がり、

京馬「ありがとな、俺のために作ってくれて。金は必ず払う。じゃ・・・」

そう言い残し店を出ていった。

店員は京馬の背中をただ見送ることしかできなかった。

番長、孫堅とタイマンを張るとのこと

日も落ちて空が暗くなった頃、京馬はあるところへ向かっていた。
しばらく歩くと、くぐろうと思っていた門が見えて程普の姿もあった。

京馬「程普さん」

程普「！・・・あ、雪村くん。さっきぶりだね」

京馬が声をかけると程普が振り向いて笑顔で返答した。

京馬「こんな時間まで仕事とはごくろうなことだな」

程普「まぁ大殿の命だからねぇ・・・それで？一体私に何の用？」

ただ会話をしにきただけではないと見抜いている程普は笑いながらも警戒を解かずに京馬を見ていた。
もしかしたら強行突破で街を抜け出す可能性もあるからだ。
そして京馬は一呼吸おいてこう言った。

京馬「あんたに頼みがある。孫堅さんに、伝言を伝えてほしい」

程普「伝言・・・？」

京馬「あぁ、内容は・・・」

――――――――――――――――――――

翌日、

京馬「・・・・・・」

孫呉の屋敷の大きな門の前に京馬は立っていた。

腕を組みまだかまだかと右足をトントントントンと踏みながらあることを待っていた。

すると、

ギィィィィィ～・・・

門がゆっくりと開き、緑色の髪にメガネを掛けたどこかほのぼのしている印象がある女性が出迎えてくれた。

陸遜「お初お目にかかります。陸伯言と申します。雪村京馬さんですね？」

京馬「あぁ」

陸遜の言葉に京馬は軽く返した。

陸遜「お話は程普さんからお聞きしてますよ。ささっ、どうぞこちらへ～」

そう言って陸遜は歩いて行き京馬はその後ろをついて行った。

歩きながら京馬は呼吸を整えて自身の緊張を無理やり解こうとしていた。

陸遜「みなさ～ん！お連れして来ましたよ～！」

そうこうしていると学校の校庭くらい広い場所についた。

そこには木製の的が立てられたり、人型の木が並べられたり、ボクシングのリングくらいの広さに石畳が敷かれた闘技場のようなところがあった。

おそらくここは訓練場なのだろうと京馬は思った。

そしてそこには程普を始め数人の女性たちがいた。

花びらの髪止めをして孫堅の面影を感じさせる人、長い黒髪に眼鏡を掛けたいかにも真面目そうな人、薄紫の髪をポニーテールに纏め孫堅と同じように褐色の肌でおそらく同じ年齢の人、薄い緑色の髪に黒い羽織を着ている子供と同じくらい小柄な人と、まさ

に十人十色の人たちが京馬をジロジロと見ていた。
見られている京馬は少し不快な気分になるが堪えて陸遜と共に程普たちの元まで歩いた。
???「ふ～ん？あなたが母様の言ってた子か・・・顔は悪くないわねぇ」
最初に孫堅似の女性がまじまじと京馬の顔を見てクスクスと笑っていた。
京馬「・・・あんた、孫堅さんの娘さん？」
孫策「えぇ。孫伯符よ。こっちが軍師の周喩」
周喩「周公瑾だ。お前のことは、文台様からある程度の話は聞いている」
京馬「どーも」
孫堅の娘、孫策は母親とは正反対の性格で明るく京馬に接し、黒髪の女性、周喩は京

馬に対して警戒心を高めて少し目付きが鋭くなっていた。
確かに孫堅が気に入っているとはいえ、得体の知れない男にそう簡単に隙を見せるわけにはいかないだろう。

孫策「それでこっちの2人が黄蓋と張昭よ」

黄蓋「黄公覆じゃ。大殿を二度も振り切るとはお主、中々やるのぉ」

張昭「・・・張子布じゃ。言うておくが、こう見えてもお主より年上じゃからな」

ポニーテールの女性、黄蓋は孫堅から逃げ切っている京馬をはっはっはっと笑いながら絶賛しており、小柄な女性、張昭は周喩と同じように目を鋭くしながら京馬を見ていた。
京馬は全員の名前を聞いて内心ではかなり動揺してしまうが表に出さないようにポーカーフェイスを維持していた。

京馬「・・・程普さん」

程普「何？」

京馬「俺は孫堅さんに伝言を伝えるように言ったよな？」

程普「ちゃんと伝えたけど？」

京馬「じゃあ何で孫呉の武将と軍師の方々まで来てんだよ？」

孫堅だけ来てくれれば京馬はよかったのだが、孫策や周喩を始めとする武将と軍師たちまで来ているため面倒なことになりそうだと思った。

程普「軍議の時に話しちゃったからねぇ。それで皆も同行するって話になったの」

京馬「余計なことを・・・」

軽く笑っている程普に京馬は頭を抱えてしまう。

そんな時、黙っていた張昭が口を開いた。

張昭「それにしてもじゃ、文台様にあのような申し出をするとは何様のつもりじゃ。文台様を含めここにおる儂ら孫呉は多忙なのじゃぞ」

張昭はジト目で京馬を睨みつけて正論を言った。

確かに孫呉は今、袁術にコキ使われている状況のため多忙である。

しかし京馬は、

京馬「じゃあそんな多忙にもかかわらず俺を追いかけ回していたのはどこの誰っすか？」

張昭「ぬぅっ・・・!?そ、それは・・・」

正論に正論をぶつけて張昭を論破した。

自分の主が政務をほったらかして人を追いかけ回しているのだから張昭はぐうの音も出なかった。

孫策「それにしてもつれないわねぇ～。孫呉に仕えればこんな美人と一緒にいられるのになぁ～」

そう言いながら孫策は自分の服を掴み見えるか見えないかくらいのところで胸元をチラチラと京馬に見せつけた。

江東の麒麟児と呼ばれた武将がこのような行動を取ることに三國志好きの京馬はがっかりしてしまう。

京馬「・・・ところで孫堅さんは？」

孫策「ちょっとぉ！無視しないでよぉ！」

京馬は孫策をスルーして孫堅はどこかと辺りをキョロキョロと見渡した。

周喩「孫堅様ならもう少しでこちらに来られる。しばらく待っていろ」

陸遜「でもいいんですかぁ？あんなことを約束してしまってぇ？」

程普「伝言を聞いた時は流石に驚いたわ」

黄蓋「よほどの自身があるのか、それとも身の程知らずの阿呆か、どちらなのかのう？」

張昭「身の程知らずの阿呆じゃろ」

みんながワイワイ話していると、

孫堅「待たせたな!!」

訓練場へ堂々とした振舞いで孫堅が歩いて来た。
孫策たちは畏まり京馬はやっと来たかと頭を掻いた。
孫堅は京馬の元まで歩いて好戦的な笑みを浮かべた。

孫堅「程普から聞いたぞ。オレとお前で『たいまん』ってのをすりゃあいいんだろ？」

京馬「あぁ」

タイマン。

不良同士による1対1の喧嘩。

チーム同士による勢力争いでも度々行われていた。

京馬も何度もタイマンをしてきて怒李威武奈威斗の勢力を大きくしていった経験がある。

武器を使わずの殴る蹴るのタイマンなら孫堅に勝てると思い京馬はこれに賭けた。

京馬「俺が勝ったら、もう俺のこと諦めてくれるんすよね？」

孫堅「あぁ、オレは約束は守るぞ。だからお前も守れよ？」

京馬「分かってます。俺が負けたら孫堅さんに仕えますよ」

孫堅と京馬は共に石畳の闘技場へ行き互いに向かいあった。
孫堅はようやく京馬が手に入ると思いニヤリと笑ってしまい、京馬は指をポキポキと鳴らして引き締まった表情になっていた。
両者が睨み合う中、

京馬「んじゃあまぁ・・・先手必勝だ!!」

先に京馬が仕掛けた。
一気に間合いを詰めて孫堅の顔面目掛けて右拳を撃ち込もうとした。

バシッ!!

しかし、孫堅は余裕の表情で京馬の右拳を受け止めた。

孫堅「そんなもんか?」

京馬の拳を押し退けた孫堅は京馬と同じように右拳を大きく振りかざした。

そしてそのまま思いっきり京馬の顔目掛けて撃ち込むが、

バシッ!!

見え見えの拳を簡単に食らうまいと京馬は左手で受け止めた。

だが、

孫堅「うおりゃぁ!!」

ズドォン!!

京馬「ぐはっ!?」

なんと防がれようがお構い無しに孫堅はそのまま力任せに拳をねじ込み京馬を殴った。

殴られた反動で京馬は二歩三歩と後退りしてしまうもなんとか体制を立て直した。

顔をさすると手に血がべっとりついておりおそらく鼻血が出ているのだろうと思っ

た。

京馬（なんて怪力だよ!?ガードの上から力任せに殴るなんざボクサーくらいしか見たことねぇぞ!?それに・・・）

京馬は孫堅の拳を受け止めた左手を見た。

左手には殴られた感触がまだ残っておりジンジンと痛みが伝わっていくのが分かった。

あれをまともに食らえばと思うとゾッとしてしまう。

孫堅「何ぼけっとしてんだよっ！」

京馬「!!」

気を取られているのを逃さず孫堅は間合いを詰めて京馬に殴る蹴ると繰り出していった。

かろうじて攻撃を防げている京馬だが防いでいる箇所から痛みが走りやがて全身が

痛みに覆われていった。
今まで相手にしてきた不良グループや番長たちとは比べものにならない力に京馬は少しだけ心が折れかけてしまう。
観戦していた孫策たちは、

孫策「母様ったら容赦ないわねぇ～」

張昭「あの方はそのような言葉は知りませぬ・・・」

周喩「はぁ・・・穏、医者の手配をしておけ」

陸遜「もう既にやってますよ」

程普「でも雪村くん凄いわねぇ。炎蓮様を相手にまだ立っているなんて・・・」

黄蓋「一応はやるようじゃのう」

孫堅の敗北など誰も信じてない様子だった。
それどころか京馬がまだ倒れていないことに少し感心していた。

京馬「はぁ、はぁ、はぁ・・・!」

そして京馬の顔は口と鼻から血が流れて腕もアザが浮かびあがっていた。
孫堅は好機と見るや、

孫堅「こいつでしめぇだ!!」

京馬の顔面目掛けて右フックを繰り出した。
孫策たちもこれで終わったなと思い京馬を介抱しようと動き出した。
だが、

京馬「・・・!!」(バッ

なんと京馬は体制を低くして孫堅の右フックを顔面ギリギリで避けて、

京馬「どらぁ!!」

ガッ!!

孫堅「ぐっ!?」

孫堅の顎目掛けて右アッパーを食らわした。
その拍子に孫堅の首は跳ね上がり血飛沫が宙に舞い散った。
そのまま京馬はすかさず孫堅から距離を取った。

孫策「母様!?」

孫策たちも孫堅がモロに殴られた光景を見て自分たちの目を疑ってしまった。
孫堅は首を正面に戻し口に溜まっている血をペッと吐き捨てた。
吐き捨てた場所は血で赤く染まっていた。
孫堅はしばらく黙り京馬を見ると、

孫堅「・・・ふははははっ!!オレに拳をぶち込ませるたぁやるじゃねぇか!!どうやらテメェに手加減する必要はもうなさそうだな!!」

孫堅は再び好戦的な笑みを浮かべるが京馬は戦慄してしまった。

今まで見てきた笑みとは違い、頬も今まで以上に上がり目も完全に相手を確実に仕留める血に飢えた獣の目付きだった。

しかし京馬は深呼吸をして落ち着くと、

京馬「ぐだぐた喋ってねぇで、さっさと終わらせようぜ・・・」(バサッ

目付きを鋭くして特攻コートを脱ぎ捨てた。

インナーを着ていたがその下から筋肉が露になっていた。

孫堅「生意気なガキだな・・・後で侘びてもおせぇからなぁ!!」

京馬「テメェこそ後で泣くんじゃねぇぞ!!」

孫堅と京馬は互いに飛び出して決着をつけようとした。

ドカッ!!　バキッ!!　ドスッ!!　ガンッ!!

孫堅は今まで以上の力で容赦なく京馬を痛め突けていき、京馬も孫堅の攻撃を避けながらボディブローなどで孫堅を圧していった。

ノーガードのインファイトで両者は相手を追い詰めていった。

孫策「まさか母様がまともに殴られるなんて・・・!?」

周喩「一体何者だ・・・?」

穏「なんで炎蓮様の攻撃をかわせるようになったのですか~!?」

孫策たちは孫堅を殴り攻撃をかわしている京馬に驚いてしまった。

最初は一方的にやられていたにも関わらず急に人が変わったかのように攻撃をかわ

してきたのだから何がなんだか分からなかった。

しかし、長い間孫堅に仕え尚且老将と言われている程普と黄蓋、張昭には理解できた。

黄蓋「予測じゃ」

孫策「えっ？」

孫策は思わず黄蓋の方を見てしまう。

黄蓋「おそらくあの小僧は炎蓮様の攻撃をわざと受けて攻撃の間合いやクセを見抜いたのじゃろう。其れ故に攻撃を予測できたのじゃ」

程普「でもまさか、こんな短時間で間合いやクセを見抜くなんてね・・・」

張昭「よほど喧嘩慣れをしてなければできん芸当じゃ」

黄蓋の言葉を繋げて程普と張昭も分かりやすく解説をした。

そして、

京馬・孫堅『はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・』

殴り合いの末、京馬と孫堅は互いにボロボロで血塗れになっていた。
２人ともダメージと疲労の影響で肩で息をしていた。

京馬「俺には・・・！帰らなきゃならねぇ場所があるんだ・・・！」

孫堅「あぁ・・・？」

京馬は痛いのを堪えて口を動かした。
京馬の脳裏には、怒李威武奈威斗のメンバーが浮かんでいた。

京馬「みんなが・・・！俺の帰りを、待ってんだよ・・・！だから・・・！」

京馬はキッと孫堅を睨み、

京馬「だから!!俺の邪魔をすんじゃねぇよ孫堅!!そこをどけぇぇぇぇぇぇ!!!!!!」

孫堅へ駆け出して右拳を振りかざした。

孫堅「うぉぉりやぁぁぁ!!!!!」

孫堅も向かって来る京馬に右拳を振りかざした。

互いの拳が相手へと迫り、そして、

ズドゴオオオオオオン!!!!

互いの拳が炸裂した。

番長、孫呉の人間になるとのこと

・・・・・・・・・・

あれ・・・？何処だここ・・・？

俺はどうなったんだ・・・？

確か孫堅とタイマンをして・・・それから・・・

京馬「んんっ・・・・・」

暗闇の中、意識を取り戻した京馬はゆっくりと目を開いた。
まず視界に入ったのは知らない天井だった。

京馬「ここは・・・？」（ムクッ

ここが何処なのかと京馬が上半身を起こすと、

ズキッ・・・

京馬「うっ・・・!?」

突然身体に痛みが走り思わずうめき声をあげてしまう。

自分の身体を見ると上半身が脱がされており脇腹から腕にかけて至る箇所に包帯が巻かれていた。

頭に違和感を感じて触れてみると頭にもバンダナのように包帯が巻かれて頬には湿布が貼られていた。

京馬は自分の身体がとんでもないことになっているなと思いながらも部屋を見渡した。

まず自分はベッドの上におり、机や家具、鏡、見るからに高そうな置物などが置かれている部屋にいることが分かった。

インナーも机の上に畳んで置かれていた。

京馬「・・・何で俺、こんなところにいるんだ?あの後、どうなったんだ?」

孫堅に向かっていってからの記憶が全くない京馬は思い出そうにも思い出せなかった。

すると、

ガチャッ

孫策「あっ！やっと目を覚ましたんだ！よかった～！」

部屋の扉が開いて孫策と周喩が入って来た。

孫策は京馬が目を覚ましていることに安堵の表情を浮かべていた。

京馬「孫策さん・・・周喩さん・・・」

京馬は突然入って来た孫策と周喩に驚くもポカンとした表情になってしまう。

あれから何が起きたのか分からない京馬にはそのくらいのリアクションしかできなかった。

孫策「じゃあ母様に知らせてくるからそれまで公謹と楽しくお話でもしててねぇ～」

そう言って孫策はすぐに部屋を出て行った。

部屋には京馬と周喩の2人しかおらず気まずい空気が漂っていた。

周喩と初めて会った時に警戒されていた京馬は中々目を合わせられずどうすればよいか頭の中で必死にかんがえていた。

周喩「・・・落ち着け。別にお前のことをどうしようとする気は毛頭ない」

京馬の心を読んだかのように周喩は頬を少し上げ安心させて部屋にあった椅子に腰をかけた。

京馬「・・・あの～周喩さん」

周喩「何だ?」

京馬「俺、孫堅さんに殴りかかってからの記憶が無くて何も覚えてないんだが・・・あ

の後、俺どうなったんだ・・・？」

事情を知っているであろう周喩にあの後のことを聞き出そうと質問した。

周喩は少しため息をつき、

周喩「あぁ・・・あの後は・・・」

――――――――――――――――――

ズドゴォオオオオオン!!!!

孫堅『ぐぅっ・・・!!』

京馬『!!・・・・・』

互いの拳が頬に炸裂して硬直状態になり観戦していた孫策たちも唖然となっていた。
そして、

京馬『・・・・・・』（バタリ・・・

孫堅とすれ違いながら前のめりに倒れていった。

孫堅『ふーっ・・・！ふーっ・・・！』

肩で息をしながら孫堅は空に背中を向けて倒れている京馬を見て思った。

孫堅（やっぱりそうだ！間違いねぇ！こいつは！）

孫策『母様ーーー!!』

タイマンが終わり孫策たちは即座に孫堅の元へと駆け寄った。
孫堅は顔中傷だらけで血を流しており腕にもアザができていた。

程普『炎蓮様！ご無事ですか!?』

周喩『穏！早く医者を呼べ！』

陸遜『は、はぃ～～!!』

周喩は陸遜に待機させている医者を呼びに行かせたが、

孫堅『オレのことはいい。コイツを先に手当てしてやれ』

周喩『なっ・・・!?』

孫堅は自分の手当てよりも倒れている京馬の手当てを優先するように命令した。

黄蓋『何を申されておられるのですか!?炎蓮様も重症なのですぞ!?』

張昭『そうですぞ！何処ぞの馬の骨とも知らぬ小僧の手当てを優先させるなど儂らにはできませぬ！』

自分の主が重症にも関わらず赤の他人の手当てを優先させるなど家臣として黄蓋と張昭にはできなかった。

いっそのこと京馬を牢屋にぶちこんでしまおうと言おうとした時、

孫堅『うるせぇ!!オレがそうしろと言ってんだ!!テメェらは素直に従って京馬の手当てをすりゃあいいんだよ!!』

黄蓋たちに喝を入れて京馬を手当てするようにと再度命令した。

孫策たちは身震いしてしまい何も言い返せなくなってしまった。

孫堅『じゃあ後始末は頼んだぞ。オレは風呂に入って来る』

京馬のことを孫堅たちに任せて孫堅は風呂に入ろうと屋敷へと戻ろうとした。

孫策『待って母様！せめて包帯を巻いて！』

孫策も慌てて孫堅の後を追い応急処置だけでもと止めようとしたが孫堅は聞く耳持たずでズカズカと歩いて行った。

――――――――――――――――――――

周喩「ということになっていたのだ」

周喩からこれまでの経緯を聞いた京馬は少し俯いてしまった。

京馬「そっか・・・俺、負けたのか・・・」

『タイマンで負けたら孫堅に仕える』

そう約束してしまったため取り消しができない状況になっていた。

孫堅に仕えてしまえば京馬はもう元の世界に帰ることができない。
元々帰る方法も知らないが情報を集めるつもりだったためそれもできなくなってしまう。

京馬「・・・でも、不思議だな」

周喩「何がだ？」

京馬は顔を上げて天井を仰いだ。

京馬「孫堅さんに負けたのに、全然悔しいって気持ちが湧いてこねぇんだ・・・」

このままだとチームのみんなと会えないというのにその悔しさが全く湧いてこない
京馬は自分でもなぜ悔しくないのだろうと考えてしまう。
もしかしたら自分はチームのことなんかどうでもいいと思っているのか？

京馬（って何考えてんだ俺は!?）

心にも思ってないことを頭に浮かべてしまったためそれを振り払うように左右にブンブンと頭を降った。
そんな京馬を見て周喩はフッと笑いあることを教えた。
周喩「因みにお前は3日も寝ていたからな」
京馬「へぇ～、そんなのかぁ～・・・・は？」
京馬は一瞬ポカンとなってしまい、
京馬「はぁぁぁぁ!?3日ぁ!?俺3日も寝てたのか!?」
驚きの声を上げた。
てっきり数時間くらいしか経ってないかと思っていたがまさか3日も寝ていたと知るとこのようなリアクションを取ってしまう。
それと同時に、

ぐううううう～・・・

京馬「・・・腹減ったぁ～」

腹の虫が鳴き京馬は空腹でぐったりとなってしまう。

周喩「まったく、騒がしい男だな」

驚いたかと思えば腹が空いたと嘆いている京馬に周喩は呆れてしまう。

周喩「後で給仕の者に食事を持って来させるからここで待っていろ。私は政務に戻るからな」

そう言って周喩は部屋から出ていこうとした。

そして扉を閉める直前、

周喩「念のために言っておくが、逃げるなよ?もっとも、その怪我では逃げ切れんがな」

京馬「・・・俺は約束はちゃんと守る」

周喩「ならいい」

周喩はバタンと扉を閉めて部屋を後にした。

京馬「・・・ふぅ」

京馬は再び横になり今後について考えた。

これから自分はどうなってしまうのだろうと。

――――――――――――――――――――

あれから数時間が経過した。
給仕が運んで来てくれた食事を平らげて京馬はベッドに横になった。
ずっと部屋に居ては息が詰まってしまうがこの怪我では安静にしておくのが一番のため部屋で大人しくするしかなかった。

京馬「・・・暇だ」

京馬は心からの声をポツリと呟いた。

コンコンコンッ

すると扉の向こうから誰かがノックをしてきて京馬は上半身を起こした。

ガチャッ

程普「入るわよ雪村くん」

扉を開けて入って来たのは程普だった。

京馬「あ、程普さん。つうか俺の了承得る前に入るなよ」

程普「あら？駄目だった？」

京馬「いや、別にいいけどさ」

程普は周喩と同じように椅子に腰をかけた。

程普「怪我の具合はどう？」

京馬「・・・まだ少し痛むけど、別に歩けない程じゃねぇよ」

京馬は左肩をグルグルと回して大丈夫だと程普にアピールをした。

程普「なら良かった。じゃあ悪いけど一緒に来てくれない？」

京馬「行くって何処に・・・？」

程普「玉座の間」

程普から行き先を聞いた京馬は孫堅が呼び出したのかと悟った。

京馬「いよいよか・・・分かった」

京馬はベッドから起き上がって机の上のインナーを着た。

京馬「あれ？そういや・・・」

京馬は特攻コートがないことに気付き部屋中を見渡すも何処にも見当たらなかった。

程普「羽織なら玉座の間にあるから安心して」

程普からコートの在りかを聞いた京馬は一安心した。
そして程普と京馬は部屋から出て玉座の間へと向かって行った。

京馬「・・・程普さん」

程普「ん？」

京馬は歩きながら前を歩いている程普にあることを聞いた。

京馬「その・・・俺のこと、怒ってないのか・・・？俺、孫堅さんをあんなに痛めつけたんだぞ？」

いくらタイマンとはいえ、京馬はこの世界で高い地位についている人を殴ってしまったため少しばかり罪悪感が残っていた。

程普「大丈夫よ。確かに、大殿をあそこまで痛めつけて許せないところもあるけど、過

ぎたことだし。黄蓋も張昭先生も納得はしてくれてるわ」

京馬「・・・ならいいんだけどよ」

そうこうしている内に玉座の間の前に到着した。

ギィィィィィ～・・・

程普がゆっくり扉を開けると、

孫堅「やっと起きたか、待ってたぞ」

そこはまさしく玉座の間と呼ぶには相応しい広さと鮮やかな装飾の部屋で中央にある椅子には孫堅が堂々と座っていた。

その左右には孫策を始めタイマンを観戦していた武将や軍師が並んでいた。

程普も孫堅の隣へと行き、京馬も孫堅たちの正面に立ったのだが、腑に落ちないことがあった。

京馬「・・・孫堅さん」

孫堅「あぁ？」

京馬「俺はいまだに怪我を負って包帯を巻いているにも関わらず、なんであんたはそこまで重症じゃないんすか？」

少なからず、孫堅もボロボロになっていたことを京馬は覚えていたのだが、孫堅は包帯を巻いていないどころか傷もまったく見えていなかった。

孫堅「あの程度の傷なんざ、1日ありゃあすぐに治る」

京馬「んなアホな・・・」

孫堅の返しに京馬は呆然となってしまう。

孫堅「まぁんなこたぁどうでもいい。京馬、オレがお前をここに呼んだ理由、分かるよな？」

京馬「・・・・・・」

孫堅はニヤリと笑い京馬は少し落ち込んだ顔になってしまう。
今さら取り消しにするのは京馬の男気が許さないため現実を受け入れることにした。

京馬「ええ、分かってます・・・俺は」

孫堅「だがその前に、聞きたいことがある」

仕えますと言おうとした矢先、孫堅が京馬の言葉を遮って質問があると言った。
京馬は一体何を聞きたいのだろうと首を傾げた。
だが孫堅の次の質問で京馬は動揺してしまった。

孫堅「お前、生まれ故郷はどこだ？」

京馬「えっ・・・」

孫堅から出身を聞かれてしまい京馬は焦ってしまう。

京馬（マズイな・・・正直に話しちまえば絶対怪しまれるし、何より信じてもらえるか・・・かといって嘘をつけばすぐにバレるかもしれねぇし・・・）

なんて答えればよいか京馬は必死になって考えてそれが顔に出てしまっていた。

孫堅「・・・やっぱり直ぐに答えられねぇか」

京馬「ん・・・？」

孫堅は京馬の様子を見て思った通りだと言わんばかりの顔になっていた。

孫堅はこうなることを予想していたのかと京馬は不思議に思った。

そして孫堅の次の発言に京馬は驚愕の表情になってしまった。

孫堅「お前、この世界の住人じゃねぇな？」

京馬「なっ!?」

孫堅は京馬の心を見抜くように確信を突く発言をした。

京馬もまさか孫堅がそのようなことを言うとは予想外だったため唖然としてしまう。

京馬「な、何言ってんすか・・・？俺が故郷を直ぐに言えないからって、少し無理やりすぎますよ・・・」

ちらりと孫策たちを見るも誰も京馬の言葉に頷かず、それどころか孫堅の発言に確信がある様子だった。

すると周喩が京馬の元へ歩いて行った。

周喩「お前の羽織に入っていたものだ」

そう言って周喩は京馬にあるものを差し出した。

京馬「あっ・・・」

それは京馬がいつも持っている写真だった。
写真には男女数十人が写っており真ん中に京馬が座りそれを囲むように並んでいた。
京馬は今の格好と同じで周りの男女たちも京馬と同じように不良の格好をしていた。
これは京馬がチーム結成時に撮った写真で唯一の宝物でもある。

程普「絵にしては繊細すぎるし、それに感触も滑らか、そんなの見たことないわ」

張昭「うむ。まるで鏡に映した景色を紙に閉じ込めたとしか思えぬ代物じゃ」

黄蓋「まさしくこの世のものではない、と言ったところよのう」

程普たちからも指摘されて京馬はもう誤魔化せない状況に追い込まれてしまった。
自分が他の世界から来たとバレてしまったらどうなってしまうのだろうと。

孫策「母様の言っていた通りね」

陸遜「はい～。やはり雪村さんは天の御使いなのですね～」

京馬「ん？・・・ちょっと待て」

陸遜が気になることを言ったため京馬は孫呉の重臣たちに聞いた。

京馬「なんだよ？その、天の御使いって？」

聞いたことがない言葉に京馬は首を傾げてしまう。
それを見て周喩が天の御使いについて説明をした。

周喩「菅輅という占い師の予言だ。『星に乗って降臨する天からの御使いが乱れた世を鎮める』とな」

京馬「・・・それが俺だと？」

天の御使いの説明を聞いた京馬は自分ではないと内心で思った。

自分は番長で敵を徹底的に叩きのめすため天の御使いなど相応しくない２つ名だと。

孫堅「お前がこの街に来た前の日に流れ星が落ちた。んで次の日にお前に会った。あの時思ったんだ。コイツはもしや天の御使いなんじゃねぇかってな」

京馬「・・・で？俺が天の御使いだとして、孫堅さんは俺に何をしろと？」

一体自分をどうする気なのだろうと京馬は孫堅にストレートに聞いてみた。

自分を使って孫呉の名を広めようものならタイマンで負けたとはいえ素直に従うわけにはいかない。

京馬の質問に孫堅はこう答えた。

孫堅「簡単な話だ。孫呉に天の血を入れる。その為には京馬、お前は今日から我が家の女共を孕ませるのだ」

京馬「・・・・・はい？」

孫堅の返答に京馬はポカンとなってしまい孫堅たちも開いた口が塞がらなかった。

京馬「・・・はぁぁぁぁぁぁぁぁ!!??」

そして我に返った京馬は腹から驚きの声をあげてしまう。

それもその筈。

まさか自分をそんなことに利用するなんて思ってもいなかった。

京馬「いやいやいやいや!!おかしい!!いくら何でもあんたはおかしなことを言ってる!!」

1人だけならともかく、全員を孕ませるなんて流石の京馬でも気が引けてしまう。

孫策たちも反対するだろうとチラッと見ると、

孫策「あぁ～成る程・・・」

まったく動揺している素振りを見せておらずむしろ納得していた。

京馬「孫策さん！なんで納得してんだよ!?」

孫策「だって母様にしては名案だもの。京馬が何人か孕ませれば、呉に天の血が入ったと大陸中に広まるしね」

京馬「周喩さん！自分の主の命令とはいえいいのか!?」

周喩「文台様が決められたことだ。まぁ私としても悪くない案だしな」

京馬「程普さん！」

程普「別にいいんじゃない？それに雪村くんもいい男だし」

黄蓋「はっはっは！面白いことになったものじゃのう！」

陸遜「そうですねぇ～」

京馬「黄蓋さんに陸遜さんまで・・・！張昭さん！」

張昭「・・・諦めろ」

京馬「そ、そんなぁ～・・・」

意義を唱えるものが1人もおらず京馬は手をついて落ち込んでしまう。

孫呉にいる理由が女を孕ませるという卑猥すぎるものは京馬のプライドに大きな傷が残ってしまう。

その様子を見た孫堅は、

孫堅「・・・・・京馬ぁぁぁぁぁ!!」

京馬「!?」

頭の血管がぶちキレたかの如く怒鳴りヅカヅカと京馬の元へ歩き胸ぐらを掴み上げ

た。

孫堅「一体何が不満だというのだ!?お前も男なら股に立派な刀が下がっているだろうが!!」

京馬「大声でなんつーこと言ってんだ!?」

勢い任せに揺さぶっている孫堅に京馬は抵抗することしかできなかった。
ようやく孫堅の手を振りほどき地に足をつき喉をさすりながら呼吸を整えた。

京馬「はぁ、はぁ、はぁ・・・孫堅さん」

孫堅「あ?」

京馬「孫堅さんは、一体何がしたいんすか?」

孫呉の上に立つ孫堅の目的だけでも知っておきたい京馬は恐る恐る聞いてみた。

孫堅「んなもん決まってるだろ。乱世を治めて孫呉が天下を取ることだ」

京馬の質問に孫堅はあっさり答えた。

今の孫呉の状況はあまりよろしくない。

袁術の配下につきほとんどの手柄を袁術に取られている。

そんな状況にも関わらず本当に天下を取れるのだろうかと。

孫堅「お前の言いたいこともある程度は予想はつく・・・けどオレは本気だ。必ず孫呉を天下に立たせる。取れる取れないの話じゃねぇ、オレたちは天下を取るんだ」

笑いながら夢を語っている孫堅に孫策たちもウンウンと頷いている。

それを聞き、京馬は周喩から返してもらった写真に目線を移した。

チーム結成時、夢は全国制覇と掲げた。

もちろんチームのみんなからは『でかすぎる』と冗談半分で笑われた。

しかし京馬はこう答えた。

京馬『やれるかやれねぇかじゃねぇ。俺たちはやるんだ。全国制覇をな!!』

京馬「・・・・・くくくっ」

当時のことを思い出して京馬は少し吹き出してしまう。

張昭「貴様!文台様の!我ら孫呉の夢を嘲笑う気か!?」

京馬「いやいや、そうじゃねぇっすよ」

馬鹿にされたと勘違いしている張昭を手で制して落ち着かせた。

京馬「夢は違えど、まさかここにも俺と同じ志しで夢を成し遂げようとする人がいるなんてなぁ、って思って」

そして京馬はニカッと笑い、

京馬「分かりました！この雪村京馬！孫文台を天下人にするために孫呉に仕えてやりますよ!!」

タイマンに負けたなど関係なく孫堅に仕えることを決めた。

孫堅「よぉし！よく言った！」

京馬の自信に溢れた笑みを見て孫堅は京馬が孫呉に仕えたことを喜んだ。

それは孫策たちも同じだった。

陸遜「ではこちらをお返しいたしますね～」

陸遜が京馬の元へ行き畳んだ特攻コートを差し出した。
京馬は特攻コートを掴み、

バサァッ！

と大きな音を立てて特攻コートを羽織った。
こうして京馬は、孫堅の元で精進することになった。

番長、孫呉の将たちと交流を深めるとのこと

京馬が孫呉に来て一週間が経った。
孫堅に仕えることを決心したものの、やはり初めての世界での生活は慣れないことが多い。
まずは文字がさっぱり分からない。
日本語は通じるにも関わらず、文字は昔の中国の文字のためとても苦労している。
そこで京馬は、

陸遜「う～ん、こことここ、あとここもですねぇ。あっ、こんなところも」

京馬「うわぁ～結構間違ってるな俺・・・」

軍師の陸遜から文字の読み書きを教わることにした。
周喩は孫呉の筆頭軍師のため忙しく、張昭は政治やらの仕事が多いためさすがに京馬も頼めなかった。

仕方なく書庫で読み書きの勉強をしていると偶々見かけた陸遜が仕事の合間なら教えてもいいと言ってきたため、京馬は有り難く教わることになった。

京馬「今回結構自信あったのにな～・・・」

陸遜「でも最初よりは半分くらい覚えられてますから大したものですよ～」

京馬は今、陸遜の自室で机を挟んで座っていた。

勉強内容は、京馬が考えた文を紙に書いてそれを陸遜が訂正するというシンプルなものだった。

一週間かけて必死に文字を覚えようとはしているものの英語のように文節や動詞の配置などが難しく中々覚えられない。

自分の不甲斐なさに京馬は頭を机に伏せてしまう。

京馬「悪いな穏、冥琳や雷火さんと同じくらい仕事が忙しいのに俺の勉強なんかに付き合ってもらって」

陸遜「大丈夫ですよ。このくらいどうってことありませんから。そもそも私が言い出したことですから」

自虐的になっている京馬を陸遜は優しく宥めてくれた。

京馬が孫呉に来てか、『真名』というものを知った。

真名とは、家族と同じくらい親しい者たちしか呼び合うことを許されない真の名前。

他人が真名を呼べば死罪になってもおかしくないくらいとても大切なもの。

孫堅を始め孫策たちも孫呉の人間となった京馬に真名を教えてくれた。

孫堅は『炎蓮（イェンレン）』、孫策は「雪蓮（シェレン）」、周喩は『冥琳（メイリン）』、陸遜は『穏（ノン）』、程普は『粋怜（スイレイ）』、黄蓋は『祭（サイ）』、張昭は『雷火（ライカ）』という真名らしい。

ちなみに京馬には真名がないためみんなから京馬と呼ばれている。

穏「では今日はここまでにしましょうか」

京馬「・・・そうだな」

もう少しだけ勉強したかったが穏の仕事のことも考えれば無理に頼めないと思い紙や筆の整理を始めた。

京馬「いつもありがとな。読み書きできるようになったら穏の仕事も手伝うからよ」

穏「ふふっ。お気持ちだけでも十分ですよ」

和みながらも京馬は荷物の整理を終えて穏の自室から出て行った。

廊下を歩きながら京馬はこの世界と自分の役目について改めて考えた。

この世界は後漢末期で三国志の武将たちはほぼ全員が女。

管輅という占い師の予言では天から御使いがこの地に現れて乱世を治めると言ったらしい。

孫堅曰く、それが自分だと。

そこで孫呉に天の血を入れるために武将から軍師までも孕ませるように命じられた。

京馬「・・・改めて考えてみると、俺とんでもない状況に置かれてるな」

???「何がとんでもないのじゃ？」

ははは と京馬が苦笑いしていると後ろから声をかけられたため振り向くとそこには張昭こと雷火が立っていた。

京馬「あ、雷火さん、どうもっす」

雷火「どうもではない。お主何をやっとるのじゃこんなところで？・・・ってあぁ、穏から文字の読み書きを教わっておったのか」

京馬の持ち物を見て雷火は穏の勉強会を終えた後だと推測した。

穏から勉強会の話を聞いていたため京馬が熱心に取り組んでいることには雷火も感心していた。

雷火「読み書きを覚えようとするその心がけは感心じゃ」

京馬「は、はぁ・・・」

雷火「じゃが京馬よ、お主の孫呉での役目は文字の読み書きを覚えることではない。それは分かっとるな？」

ジト目で雷火から見られて京馬は気まずそうに顔に出してしまう。

雷火は何かと厳しいことを言ってくるがそれも孫呉のためであるので誰も文句は言わない。

京馬「そりゃあ分かってますけど・・・」

雷火「けど何じゃ？」

京馬「いきなり孕ませろって命じられても、会って間もない女を孕ませる度胸なんざ俺にはねぇっすよ。せめて交流を深めてからとか・・・」

雷火「それは分かっておる！無理やり孕ませろとは言うとらんじゃろ！」

京馬「す、すんません・・・」

雷火の叱責が廊下に響き渡り、京馬も何か悪いことを言っただろうかと疑問に思いながらも取り敢えず謝った。

孫呉に血を入れると言っても京馬はまだ武将や軍師たちとの交流が浅いため、そこは雷火も理解していた。

雷火「はぁ、まったく・・・じゃがお主の天の国での話は大変興味深い。特に銀行やら目安箱などは中々面白いものじゃしのう・・・”あべのみくす”なるものはよく分からんかったが」

京馬はたまに周喩こと冥琳たち軍師に京馬がいた世界（天の国と呼ばれている）での歴史やら政治などを話している。

治政関連の仕事を主としている雷火は銀行の仕組みに結構食らいつき導入してみようと言っている。

この世界での歴史が天の国では古い歴史として語り継がれていることを教えた時は冥琳たちも面食らっていた。

これから起きることを京馬は話そうとしたが、

孫堅『これから起きることを知ったらつまんねぇだろうが!!』

と、孫堅から叱責されてしまい話すのをやめた。

雷火「まぁ何はともあれ、お主の天の国での話、時間が空いた時で構わぬからまた聞かせてくれ」

そう言って雷火は政務に戻るためにこの場から離れた。

京馬も雷火から言われた孫呉での自分の役目がいかに重要なものか改めて再認識した。

京馬「・・・考えても仕方ねぇし、なんか食いに行くか」

空いた腹を満たすために京馬は街へと出向くことにした。

―――――――――――――――――――――

京馬が街へ赴くといつもと変わらず多くの人で賑わっていた。
慣れた足取りで京馬がある店に入ると、

店員「いらっしゃいま・・・あぁ京馬さん！また来て下さったのですか！」

京馬「よっ、茜」

担々麺をタダで食べさせてくれた店員が笑顔で元気よく挨拶をしてきた。
店員の名は練師。
真名を『茜（アカネ）』。
店員かと思っていたこの娘はこの店を切り盛りしており、言わば店長でもあった。

彼女の作る料理は街でも絶賛されており多くの人が通っている。
京馬も通うようになり真名を交わすまで親しくなった。

京馬「今日も茜の料理食べに来たんだが、席全部埋まってるみてぇだな・・・」

京馬の言うとおり、店の席はすべて他の客で埋まっており、空いているところが見当たらなかった。

茜「申し訳ありません京馬さん。折角来て下さったというのに・・・」

京馬「・・・いや、多分大丈夫かもしんねぇぞ?」

茜「え?」

頭を下げている茜は京馬の大丈夫という言葉に頭を上げてしまう。
京馬はある席を見つけるとそこへ歩いて行き座っている人物の正面に座った。
その人物は、

祭「ん？おぉ京馬ではないか」

京馬「どうもっす祭さん」

黄蓋こと祭だった。

祭は酒を飲みながらツマミを食べており顔も赤くなっていた。

京馬「こんな時間から酒盛りっすか？」

祭「応とも。儂にはこれが生き甲斐なのじゃ。それに少しばかり飲んでもバチは当たらぬわ」

京馬「少しばかり・・・？」

祭の机には既にからの酒器が何本も置かれており、これのどこが少しばかりなのだろうと京馬は疑問に思うがそこに突っ込むと祭からガミガミ言われそうなため触れない

ようにした。

すると茜が京馬の元へ寄り注文を聞こうとした。

茜「京馬さん、何にしますか？」

京馬「じゃあ餃子で」

祭「あと酒も頼むぞ」

京馬「・・・まだ飲むんすか？」

京馬の注文に便乗して祭も酒を注文した。

茜「あの～黄蓋様、そのくらいにした方がよろしいのでは？まだ仕事が残ってらっしゃるはずですよね？」

飲み過ぎている祭を心配して茜もこれ以上飲ませるのをとめようとするものの、

祭「構わぬ。仕事くらい酒を飲みながらどうとでもなるわ。ほれ！早く持ってこんか！」

茜「は、はいっ！」

祭から少し怒られた茜はたじろいで厨房へと向かった。

京馬「祭さん、ほんとにそのくらいにしといた方がいいっすよ。酔っ払ってたら将軍としての威厳ってもんが・・・」

祭「お主までかようなことを申すか。儂は酔っておらんというのに、まったく近頃の若いもんは・・・」

ブツブツ言いながらも祭は再び酒を口に運んだ。

京馬「ホントにどうなっても俺知らないっすからね？」

???「諦めた方がいいわよ？祭は酒が入ると止まらなくなるから」

京馬「そりゃ分かってますけど、流石に限度ってもんが・・・あ？」

いつの間にか誰かが会話に交ざっており誰だろうと空いている席を見ると、程普こと粋怜が座っていた。

京馬「・・・いつから居たんすか粋玲さん？」

粋玲「京馬くんが餃子を注文した辺りから」

京馬「全然気がつかなかった・・・」

そんな前から座っていたのかと京馬は驚いてしまう。

祭「おぉ粋玲！聞いとくれ！京馬のヤツが儂の生き甲斐を奪おうとするのじゃ！お主

からもなんとか言うとくれ！」

祭はまるで自分は悪くないかのような口振りで粋玲に京馬をなんとかしてくれとお願いした。

粋玲は『はぁ・・・』とため息をついて額に手を置いた。

粋玲「まったく、私は今休みだからいいけど・・・祭、貴女はまだ仕事の最中の筈でしょ？それなのにこんな時間から酒なんて飲んで・・・これはもう冥琳に言うしかないわね」

祭「なっ!?冥琳じゃと!?」

冥琳に言いつけるという粋玲の言葉に祭は冷や汗をかいてしまう。

冥琳は軍師の中でも筆頭軍師の地位にいるため祭と同等の立場にいる。

そのため冥琳は年上の祭だろうと厳しく取り締まっている。

祭「ま、待て粋玲！冥琳に言うのだけは勘弁しとくれ！もしバレたら儂は！」

粋玲「だったらサボってないでちゃんと仕事しなさいよ」

祭「ぬぅぅ・・・」

冥琳に仕事をサボっていることをばらされたくない祭は観念して仕事に戻ることを決めた時だった。

京馬「・・・祭さん、もう手遅れかもしれねぇっすよ」

祭「ん?どういうことじゃ・・・?」

京馬がバツの悪い表情をしているのに祭と粋玲は疑問に思うが何やら後ろから鋭い視線を感じて振り向くと、

冥琳「・・・・・」

冥琳が佇んでおり祭を鋭く睨んでいた。

祭「め、冥琳・・・」

祭の顔は酔っ払った赤い顔から血の気が引いた青い顔へと変色していった。

京馬と粋玲もあ～あ、と苦笑いをしていた。

冥琳「さて祭殿、貴女はまだ政務の仕事があった筈ですが、こんなところで何を？」

冥琳は視線を祭から机へと移した。

机の上には空の酒器が何本も置かれており食べ掛けのツマミの皿もあった。

祭「こ、これはじゃのう・・・そうじゃ！粋玲と京馬じゃ！こやつらが飲め飲めとうるさくてのう！」

粋玲「ええっ!?」

京馬「はっ!?祭さん!?」

コイツ!俺らを売りやがった!と内心で京馬と粋玲は祭を恨むも直ぐに祭に天罰が下った。

茜「お待たせしましたー、ご注文の餃子とお酒になりますー。ってあれ?程普様に周喩様も来ていらしたのですか?」

茜がお盆に京馬と祭が頼んだ餃子と酒を運んで来た。

それにより祭も固まってしまい、冥琳はやはりかと思いフッと笑った。

冥琳「・・・練師よ、その餃子と酒は誰が注文したのだ?」

茜「え?えっと、餃子は京馬さんが頼まれて、お酒は黄蓋様ですけど・・・」

冥琳「そうか・・・」

冥琳は祭を見ると、当の本人は汗をダラダラと掻いていた。
もはや弁解の余地はなかった。

冥琳「さて祭殿、ここでは練師に迷惑が掛かりますので、場所を変えてお話でもしましょうか」

祭「す、粋玲！京馬！助けてくれ！」

冥琳から腕を掴まれて逃げられない祭は京馬と粋玲に助けを求めるも、

京馬「粋玲さん、餃子たくさんあるんで良かったらどうっすか？」

粋玲「ありがとう京馬くん。練師、お酒は私が貰うから置いといて」

茜「は、はい」

完全に祭を無視して話に夢中になっていた。

祭「この薄情者どもがぁーーー!!」

冥琳「貴女が人の事を言える立場か」

仕事をサボった挙げ句、京馬と粋玲を売った祭は冥琳に連れていかれてしまった。

茜「放っておいていいんですか？」

粋玲「自業自得よ」

京馬「仲間を売るような人は庇えねぇよ」

――――――――――――――――

粋玲と話を済ませて茜の店を後にした京馬は屋敷の自室へと戻り文字の読み書きの勉強を始めた。
空いた時間を少しでも活用しようと1日の半分を勉強に注ぎ込んでいる。
すると、

ガチャッ

雪蓮「は～い京馬！調子はどう？」

孫策こと雪蓮が勢いよく扉を開けて入って来た。
京馬はビックリするも雪蓮と分かるとホッとした。

京馬「なんだ雪蓮か・・・」

雪蓮「なんだって何よー！ぶーぶー！」

リアクションが低い京馬に雪蓮は頬を膨らませて寝床に腰掛けた。

京馬「また仕事すっぽかして来たのか？」

雪蓮「大丈夫よ、後は冥琳が全部やってくれるから」

京馬「それは押し付けと言うのでは？」

祭と同じように仕事をサボっている雪蓮に呆れるも話し相手が出来たことに笑顔になってしまう。

京馬は筆を置いて雪蓮の隣に座った。

雪蓮「どう？ここでの生活はもう慣れた？」

京馬「まぁ大方はな、けど毎日文字の読み書きの勉強するだけでタダ飯食ってるって感覚だな」

仕事を与えられてもらえず勉強以外何もすることがない京馬にとっては孫堅に申し

訳なく思っていた。

雪蓮「何言ってるの。京馬には母様からの使命があるじゃない。なんだったら今ここで私とやっちゃう？」

そう言って雪蓮は生足をチラチラと見せつけてくる。

ツヤツヤと輝いている生足に京馬はゴクリと喉を鳴らすが直ぐに正気に戻った。

京馬「そうやってからかうのは止せよ。それにこういうのはもう少し交流を深めてからだ」

雪蓮「とか言っちゃって、少し本気になっちゃったくせに～」

京馬「うぅ・・・／／／」

完全に否定しきれないため京馬は少し顔を赤くして反らしてしまう。

雪蓮「京馬ぁ～。私、女の子がいいなぁ～」（ギュッ

京馬のリアクションを見て面白がり雪蓮は首に手を回して抱きついて来た。

京馬は内心、ドキッとなるが美人に抱きつかれる機会なんて滅多にないためもう少し堪能しようとした時、

ガチャッ

冥琳「しぇ～れぇ～ん～！」

おっかない形相をしている冥琳が扉を開けて入って来た。

雪蓮「め、冥琳・・・！あ、あはは～・・・」

いいムードが一瞬で壊れてしまい雪蓮はとひきつった笑みになっていた。

冥琳「仕事を放り出して京馬とイチャイチャするとは、随分と暇なようだな。そんな

に暇ならば今から一週間分の仕事を・・・」

雪蓮「やるやる！仕事ちゃんとやるから！じゃあ京馬！またね～！」（ピュー！

冥琳がいい終える前に雪蓮は部屋を飛び出して行った。

冥琳「はぁ、祭殿といい、まったく・・・」

京馬「あんたも苦労してるな冥琳」

疲れきっている冥琳に京馬は同情してしまう。

仕事が多忙にも関わらず、サボっている雪蓮や祭を捜すのだからその苦労は京馬の想像を超えるだろう。

冥琳「もう慣れたものさ。それはそうと文字の読み書きは出来るようになったか？」

京馬「・・・まだ、です」

京馬は気まずそうに顔を反らしてしまう。
この世界の文字の読み書きがいまだに出来ない京馬にとってはこれ以上恥ずかしいことはない。

冥琳「焦る必要はないぞ？穏が覚えがいいと言ってるからな。この調子なら政務を手伝わせてもいいとな」

京馬「ありがとな」

冥琳「だがお前も本来の使命を全うしてしらわなければな」

冥琳はからかうかのように笑いながら京馬を見つめた。

京馬「わ、分かってるさそんくらい」

冥琳「はっはっは！ならいい。邪魔して悪かったな」

機嫌が良くなった冥琳は笑いながら部屋から出て行った。
1人になった京馬は勉強を再開した。

―――――――――――――――――――――

深夜。
外も暗くなった頃、京馬は寝床で眠っていた。
勉強疲れで睡魔に襲われたため、直ぐに眠りについてしまった。
京馬がぐっすり眠っていると、

モゾモゾ・・・

京馬（んん・・・？何だ・・・？）

自分の身体を誰かに触られている感覚が走り眠気を押しきって重い瞼を開くと、

炎蓮「よぉ京馬、起きたか？」

目の前に孫堅こと炎蓮の顔があった。

炎蓮は京馬に覆い被さるように一緒に横になっていた。

京馬「・・・ッ!?何してんすか!?」

炎蓮が目の前にいることで眠気が吹き飛んだ京馬は起き上がろうとするも手を抑えつけられて起き上がれなかった。

炎蓮「なぁに、ちょっとオレと夜の相手をしてもらうだけだ」

炎蓮はニヤリと笑い京馬のインナーを掴んだ。

京馬はハッとなり炎蓮が何をしに来たかを察した。

京馬「いやいや炎蓮さん！流石に今からは勘弁して下さいよ！こういうのは雰囲気ってもんが！」

炎蓮「うるせぇな・・・つべこべ言わずに脱げぇ！」

そう言って炎蓮は力任せに京馬の服を脱がそうとした。

京馬「ちょっ！やめっ！あぁーーーーーーーーー!!!!」

――――――――――――――――――――

翌日、京馬が1日部屋から出て来なくなってしまい、孫堅の肌が綺麗になっている経緯を知る者は、誰もいない。

番長、軍議に参加するとのこと

粋玲「やぁぁっ！」

キィィィンッ!!

京馬「うおっ!?」

京馬が孫呉に来てさらに1週間が経過した。
京馬は今、訓練所にて粋玲と手合わせをしていた。
互いに剣を持ち距離を詰めたり離したりとジリジリと向かい合っていた。
何故このようなことになっているのかというと、粋玲から京馬に持ち掛けてきたからである。
粋玲曰く、特訓しといた方がいいということらしい。
まぁなんとかなるだろうと思っていたが、

粋玲「ほらほら京馬くん、休んでる暇なんかないわよ」
京馬「くっそ～！」

京馬は防戦一方に陥っていた。
粋玲は慣れた感覚で剣を握り余裕の表情をしていた。
孫堅とほぼ互角で殴りあったにも関わらず、なぜ粋玲と戦って押されているのかというと、

粋玲「思った通りね。京馬くん、武器の扱いに慣れてないでしょ？」
京馬「うっ・・・！」

粋玲から欠点を指摘されて京馬は図星を疲れた表情になってしまう。
京馬に限ったことではなく不良の世界では拳だけで戦闘を繰り広げていたため武器を持つことなどあまりなかった。
しかし、いざ武器を持つとなると木刀や竹刀とは比べ物にならない程重く扱うことは困難になる。
更に持っているのは本物の剣で人を簡単に殺してしまうため剣を握っている京馬の

掌は汗で濡れていた。

粋玲「どうしたの京馬くん？炎蓮様と闘った時の勢いはどこに行ったの？もしかしてあの時のはまぐれ？」

一方粋玲は涼しい顔で京馬を挑発した。

孫呉の将軍というだけのこともあり戦い慣れている粋玲にとっては武器に関して素人同然の京馬の相手など赤子をあやす程の至極簡単なことなのだろう。

京馬「・・・武器扱えねぇからって、俺を嘗めないでくれませんかね？」

粋玲の軽い挑発に京馬は乗ってしまい剣を握る力を強めた。

しかし京馬には剣術のスキルがまったくないため粋玲とでは天と地の差がある。

粋玲は手加減しているがこのままでは負けてしまう。

京馬（ッ！そうだ！）

その時、京馬の脳に電撃が走った。
一か八かの勝負だがこれなら粋玲に勝てるかもしれないと。
京馬は剣を大きく振り上げて、

京馬「食らえっ!!」（ブンッ

なんと粋玲に向かって剣をぶん投げたのだ。
剣は粋玲目掛けて風車のように回転して飛んで行った。

粋玲「はぁっ！」

キィン!!

しかし粋玲は冷静に対処して向かってくる剣を弾いた。
その隙を京馬は逃さなかった。

ダッ!!

剣が弾かれた直後、京馬は駆け出して一気に粋玲との間合いを詰めた。
剣で粋玲とやり合っても勝てる訳がないため一瞬の隙をついて殴ろうと考えた。

京馬「貰ったぁ！」

京馬は右拳を握りしめ粋玲の腹にねじ込もうとした。
だが、

粋玲「そう来ると思った」

ザァッ!!

京馬「なっ!?」

粋玲は京馬の足を払い仰向けに転ばせた。
そして剣を突き立て京馬に目掛けて振り下ろした。

グサッ!!

しかし剣の先は京馬の顔の右へと向かい地面に突き刺さった。
京馬は殺されるかもしれないという恐怖よりも、一瞬であらゆることが起きて思考が追い付かず対処できなかったことを悔やむ気持ちが大きかった。

京馬「・・・俺が殴りかかってくるって予想してたんすか?」
粋玲「まぁね。京馬くんなら絶対こうしてくるだろうなって思ったから」

そう言って粋玲は地面から剣を引き抜いて京馬に手を伸ばした。
京馬は粋玲の手を取りそのまま引き上げられた。
服の埃をパンパンと払い落ちている剣を拾った。

京馬「やっぱ剣なんて俺には要らないっすよ。扱い慣れてないんで」
粋玲「だからこそ訓練をしとかないと。それに剣を持つ相手にも馴れないといけないしね」

京馬は片手で剣を軽くブンブンと振り自分には必要ないと言うものの、粋玲はそれでも訓練を続けさせようとした。
京馬の実力は孫堅とのタイマンで確認済のため、次の戦では出陣させる予定になっている。
戦では剣はもちろん槍や弓を使う兵がほとんどのため京馬のように素手で戦う相手など滅多にいない。
だからこそ、京馬には武器を使う相手との戦いに馴れさせなければならない。
粋玲「じゃあ続きをやるわよ。言っとくけど、もう一回剣を離したりしたら・・・分かるわよね？」
京馬「・・・はい」
笑顔なのだが目がまったく笑っておらず、次剣を投げ捨てようものなら命の保証はないと悟った京馬は身を引き締めた。
訓練の続きが始まろうとしたその時だった。

炎蓮「そこまでだ！」

訓練場に一喝学校響き京馬と粋玲が声の方に振り向くとそこには炎蓮と雷火がいた。

粋玲「炎蓮様・・・？」

京馬「雷火さんまで、どうしたんすか・・・？」

炎蓮と雷火の登場に京馬と粋玲は何事だろうと面食らってしまう。

雷火「これから軍議じゃ。２人ともすぐに来い」

炎蓮の代わりに雷火が事情を言って軍議があることを教えた。

粋玲「ッ！はっ！」

京馬「りょ、了解っす！」

京馬は何かあったのかと思いながらも返事をしたのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

しばらくして、京馬は謁見の間と呼ばれる所へと入り椅子に座っていた。

軍議ということもあり、雪蓮や冥琳を始めとした宿将、重臣たちが勢揃いだった。

炎蓮の姿はまだない。

京馬（・・・俺完全に浮いてるな）

炎蓮とタイマンした噂が広まっているせいか、重臣たちは京馬を見ながらヒソヒソと何かを話している。

明らかに自分は場違いだと思った。

ポン・・・

冥琳「気にするな、肩の力を抜け」

すると、隣に座っている冥琳が京馬の肩に手を置いて緊張を解こうとした。

京馬「んなこと言われても軍議なんざ初めてなんだぜ?何すりゃいいかわかんねぇよ」

冥琳「気になったことは遠慮なく発言するだけでいい。簡単だろ?」

京馬「そんな気楽に言われてもなぁ～・・・」

そう言いながらも京馬の肩の力が抜けて緊張も解けていった。

そうしていると、

ギィィィィ

炎蓮「よし、全員揃ってるな」

炎蓮が入って来て椅子に座った。

炎蓮が来たことによりみんな姿勢がよくなり空気がピリッとなった。

炎蓮「これより軍議を始める。既に知っている者もあるかもしれんが、黄巾党の一軍が呉郡北部に侵入し、複数の村で略奪を行った」

雪蓮「ッ!!いよいよ呉にまで来たのね！」

黄巾党が孫呉に進行していることを知った雪蓮たちは揃って顔が険しくなった。

各地で黄巾党が暴れているのは知っていたがとうとう孫呉にまでもその手が伸びてしまった。

聞いていた京馬も自分がいかに危険な世界にいるのかと改めて再認識した。

祭「して、賊の数は?」

冥琳「私がご説明致します。進行している黄巾党は初めは千でしたが、今や五千にまで膨れ上がってるとのことです」

祭「五千か・・・!」

粋玲「結構な数ね・・・」

黄巾党の一軍の人数を聞いて祭と粋玲は驚いてしまう。

雪蓮「何で千が五千にまで膨れてるのよ？」

穏「黄巾党は襲った村の農民たちを吸収してどんどん兵力を増やすんですよぉ」

京馬「略奪に飽きたらず農民に無理やり戦わせてんのかよ・・・!?」

黄巾党の兵力の増やし方を聞いて京馬は少し呆れてしまう。

軍議で初めて口を開いた京馬の発言は確かに的を得ているが冥琳は直ぐに訂正した。

冥琳「だが今回の略奪ではほとんどの民は加わることなく南へ逃れたそうだ」

雷火「当然じゃ。孫呉の民はかような乱に加わる程愚かではないからのう」

雷火の発言を聞いて孫呉の民は忠誠心が高いのかと感心してしまう。

炎蓮の忠誠心がが民にまで浸透しているのだろうと。

雪蓮「じゃあ何で増えてるのよ？」

冥琳「襲撃の成功後、戦果の拡大を狙い徐州廣陵軍から次々に援軍が送り込まれてる

そうだ」

祭「やはり背後には乱を指揮する者がおるか、何者か分からんのか？」

冥琳「申し訳ありません、指導者の正体は未だ不明です。ただ、時を同じくして豫州や荊州でも大規模な攻撃が始まっているそうです」

軍議を聞きながら京馬はあることを考えていた。

京馬（ま、指導者の正体は張角だろ・・・それよりも、こうやって軍議を見てると、完全に俺場違いだな）

今ここにいる人たちは三國志の武将たち。

国のために侵略する輩、これから出会うであろう曹操と劉備たちと戦わなければならない。

果たして自分はこの人たちの役に立てるのだろうかと。

炎蓮「まぁ敵の狙いがなんであれ、オレの庭での狼藉を見過ごす訳にはいかねぇな」

そんなことを考えていると、いつの間にか軍議が進んでおり炎蓮が笑みを浮かべていた。

その笑みは京馬が初めて会った時に見せた好戦的な笑みだった。

雪蓮「えぇ！戦ね母様！」

雪蓮も雪蓮で炎蓮と同じ笑みを浮かべていた。

血気盛んな所は親子だなと思わず笑ってしまう。

炎蓮「応！イナゴ共を踏み潰してくれる！冥琳、ただちに出陣の準備を整えよ！」

冥琳「承知しました！」

炎蓮「雷火と穏は留守居役だ！」

雷火「ハッ！」

穏「お任せ下さい～」

炎蓮の的確な指示に冥琳たちははっきりと返事をした。

炎蓮「あと京馬、お前も初陣だ」
京馬「え!?お、俺もっすか・・・!?」

炎蓮に名前を呼ばれて京馬は自分のことなのかと自身を指を差した。

炎蓮「次の戦で出陣させるって言ってただろ?」
京馬「いや、確かに言ってたましたけど・・・」

いざ初陣と言われると緊張が込み上げてしまう。
これから自分が行くところは生きるか死ぬかの戦場のため喧嘩とは訳が違う。

炎蓮「案ずるな、今回の戦でお前は何もしなくてもいい。オレたちの戦ぶりをよく見ておくだけでいい」

言い換えれば『まずは戦場の空気に馴れておけ』ということ。
右も左も分からない京馬をいきなり前線で戦わせる程炎蓮は無茶苦茶ではない。

ポン・・・

雪蓮「大丈夫よ」

京馬「雪蓮・・・」

戸惑っている京馬の肩を雪蓮が優しく置いた。

雪蓮「母様も言ってたけど、京馬は無理に戦わなくていい。何かあったら私が守ってあげるから」

先程までの好戦的な笑みなど消えて優しい笑みを浮かべて子供に話しかけるように京馬を安心させた。

京馬「あ、あぁ・・・」

雪蓮「だけどね京馬、戦っていうのは何が起こるか分からない。最悪、私や母様が死ぬかもしれない。その時は、覚悟していてね」

しかし現実はそう甘くないことも伝えて京馬に身を引き締めさせようとした。
聞いていた京馬も正にその通りだと思い、

京馬「ッ!!」（パンッ

両手で自らの頬を叩いて気合いを入れ直した。
これから自分が行くところは人が大勢死ぬ所なのだから何が起きてもおかしくないと。

京馬「あぁ分かった！」

ヒリヒリしている頬の痛みを感じながら炎蓮と雪蓮の期待に答えようと決めた。

番長、初陣を果たすとのこと

城を出陣して数日後、炎蓮率いる軍は黄巾党が占拠した街の付近に到着してそこに本陣を設けた。

兵たちが戦の準備を整えている中、炎蓮たちは黄巾党たちをどのように攻めるか軍議を始めていた。

炎蓮「冥琳、敵の動きはどうだ？」

冥琳「ハッ、全軍が城塞に立て籠り籠城戦の構えのようです」

炎蓮「他人の家を乗っ取り籠城とは・・・」

好き勝手やっている黄巾党に炎蓮は苛立ちを露にしてしまう。

京馬「にしても全軍籠城って、まだこっちは攻めてもないのに敵は慎重過ぎやしねぇか？」

こちらの兵の数は五千、つまり両軍ほぼ同じ数にも関わらず全軍籠城するなんて戦争に詳しくない京馬でも疑問に思ってしまう。

よほど炎蓮のことを恐れているのだろうかと。

そんな京馬の疑問に冥琳が答えた。

冥琳「実は先日、荊州から賊を追っていた官軍が一戦交えたそうだ」
炎蓮「んん？」
既に官軍が黄巾党と一戦交えたということに対し炎蓮の眉がピクリと動いた。
雪蓮「へぇ～そうなんだ。それでどうだったの？」
冥琳「官軍は一万の軍を率いてたらしいが、これを軽く撃退され、徐州へ撤退したそうだ」
京馬「はぁ!?一万人が半分の五千人に負けたってのか!?」
圧倒的に数で勝っていたにもかかわらず、返り討ちに合ってしまった結果に京馬は驚いてしまう。
官軍とは想像していたより弱いのかと。
雪蓮「頼りにならないわねー・・・」
祭「全く、弱すぎるのう・・・」
粋玲「きっと形だけの攻撃なのよ。官軍には本気で賊を討つ気がないのよ」
京馬「・・・つまりあれっすか?今回その官軍が動いたのは、自分たちもちゃんと賊退治を行っていますよ～、っていう意思表示ってことっすか？」
粋玲「概ねそんなところね」
自分なりに解釈した京馬に粋玲は苦笑いで肯定した。

どうやら官軍は賊と闘うことで自分たちにも手柄が得られるように動いただけらしい。

とどのつまり、勝敗などどうでもよいということ。

しかし返ってそれが黄巾党に籠城という選択肢を与えてしまい呉軍は攻めにくくなってしまった。

祭「その官軍に援軍は頼めんのか？」

粋玲「官軍なんて、居ても邪魔になるだけじゃ？」

祭「向こうも籠城をしているということは、援軍の宛があるということじゃろ。城攻めをしている最中に背後から突かれるかもしれん」

雪蓮「確かにそうね・・・」

百戦錬磨の武将たちは話を進めていき黄巾党が援軍を待っていると推測し、ならばこちらも援軍を呼ぼうと話がまとまった時だった。

京馬「普通に正面突破で行けるんじゃ・・・」

ポロッと京馬が自分の策を口から溢したのだ。

それに反応して炎蓮たちは京馬の方を見てしまう。

冥琳「おい京馬、いくらなんでもそれは」

雪蓮「まぁまぁ冥琳、折角だから聞いてみましょ。京馬、どうして正面突破で行けるっ

て思うの？」
呆れる冥琳を抑えて雪蓮は京馬の考えを聞こうとした。
京馬「いや、そんなに深い意味はないんだが・・・軍議で穏が言ってたろ？『黄巾党は襲った村の農民たちを吸収して勢力を増やす』って。つまり黄巾党の大半は農民ってことになる」
祭「まぁ、そういうことになるのう」
京馬「農民は畑仕事ばかりしてる筈だから兵士みてぇに剣技を持ってる訳でもねぇし、冥琳みてぇな軍師がいる訳でもねぇ。つまり・・・」
粋玲「戦いに慣れてないから押しきれるってこと？」
確かに京馬の言うとおり、戦に慣れてない連中が陣形やら策を整えられる筈もないため動きに無駄がある。
これなら正面突破で行けるだろうと京馬は考えた。
雪蓮「成る程ね、京馬の考えは分かったわ。だけどそれはあまり得策とは言えないわ。確かに黄巾党のほとんどは戦い慣れてない元農民かもしれないけど、戦は何が起こるか分からないの。むやみに突っ込むよりも策を一つくらい立てて置かないと」
冥琳「その通りだ。悪いがその案は却下だ」
京馬「・・・分かった」

しかし雪蓮たちは京馬の作戦はあまり有効ではないと判断した。
京馬も素人同然の自分の作戦なんて採用される訳がないと考えていたためすんなり受け入れた。
炎蓮「・・・よし、決めた」
すると、ずっと黙って軍議を聞いていた炎蓮が口を開いた。
官軍から援軍を呼ぶのだろうと誰もが思ったが、その考えが見事に覆されてしまった。
炎蓮「正面突破で行くぞ！」
『・・・えっ!?』
京馬の考えた作戦を炎蓮が実行すると言ったと同時に京馬たちは驚いてしまう。
京馬「いやいや炎蓮さん！何言ってんすか!?」
炎蓮「あん？天の御遣いのてめぇの意見を採用してやったんだろうが」
京馬「止めといた方がいいっすって！俺まだ兵法のへの字も知らないんすよ!?」
自分から言い出したとはいえ、援軍やら軍略など全くない正面突破など流石にまずいだろうと思う京馬は炎蓮に止めるように促すが本人は聞く耳持たずだった。
祭「ですが炎蓮様、ここは援軍を出すのが定石かと」
雪蓮「ええ、念のために官軍に使者を送ったら？」

炎蓮「雪蓮！祭！これは我らの戦ぞ！庭を荒らされ官軍を頼ったとなれば孫呉末代までの恥よ！」
祭「は、はっ！」
雪蓮「も～、血の気が多いんだから～・・・」
策を変える気が全くない炎蓮からの叱責に祭は畏まってしまい雪蓮は呆れてしまう。
冥琳「しかし、よく考えてみれば京馬の策は悪くないかもしれん」
京馬「冥琳まで・・・!?」
粋玲「貴女、さっき否定してなかったっけ？」
更にさっきまで京馬の策を得策ではないと言っていた冥琳までもが肯定し始めた。
冥琳「ここは黄巾党に我ら孫呉の圧倒的な力を見せつける必要がありますからな」
炎蓮「応よ、二度と手出しせんようにな」
そしていつの間にか正面突破で黄巾党を叩くという作戦になってしまい京馬は軍議の流れに呑まれていってしまった。
粋玲「では正面突破でいく、といきたいところですけれど」
雪蓮「ええ、敵は五千で籠城している。私たちも兵力は五千。五分と五分ね」
祭「とはいえ、所詮は賊。指揮官の力量も知れておるだろうな。兵を二手に分けるか？」

冥琳「ふむ。この相手ならばそれで十分でしょうな。二ヶ所を交互に攻めて指揮官を混乱させましょう」

いかにして迅速に終わらせ、尚且つ被害を最小限に抑えるか雪蓮たちが話している正にその時だった。

炎蓮「・・・ったく、めんどくせぇぇ!!」

黙って聞いていた炎蓮が痺れを切らしたかのように声を荒げた。

雪蓮「母様?」

炎蓮「さっきから黙って聞いてりゃあ、賊相手に何ぐだぐだ抜かしてやがる!急がなきゃならんのなら小細工なしで正面から一気に叩き潰してやるまでよ!行くぞ京馬!皆の者!出陣だ!」(ガシッ

京馬「は!?炎蓮さん!?」

そう言って炎蓮は京馬の襟根っこを掴みズルズルと引き摺って行った。

馬の側まで行くと京馬を背中に乗せて自分も乗り手綱を握った。

京馬「い、炎蓮さん!ちょっと待って下さいよ!まだ冥琳たちが作戦を!」

炎蓮「オレに続けぇぇぇぇぇ!!!!!」

そして激しい叫び声と共に炎蓮は馬を走らせて京馬と一緒に戦場へと駆け出し兵士たちも慌てて後に続いて行った。
雪蓮「あああもう！母様ったら！」
冥琳「こうなれば致し方ない・・・・！祭殿は右翼！粋玲殿は左翼を！」
祭「応！」
粋玲「承知！」
冥琳「全軍！突撃せよーーーー!!」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

炎蓮「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!」
凄まじい怒号と地鳴りのような足音を響かせ炎蓮を先頭とした五千の兵が城塞に殺到する。
京馬「くぅっ・・・・!!」
一方で馬に乗り慣れていない京馬は炎蓮の腹に手を回し振り落とされないようにす

るのがやっとだった。
ヒュンヒュンヒュン!!
すると城壁の上から黄巾党が炎蓮たち目掛けて矢を飛ばしてきたのだった。
炎蓮「はぁっ!!」
キィンキィンキィン!!
しかし炎蓮は腰の剣を即座に抜いて矢をすべて弾き落として行った。
まるで雨の如く降り注ぐ矢など恐れんかのように城との距離を詰めていき城壁の下へ単騎でたどり着いた。
京馬「っぷはぁ・・・!」
しがみつくことに必死で炎蓮の背中に顔を埋めていた京馬は顔を離して辺りを見渡すといつの間にか城壁まで来ていたことに驚いてしまう。
あの矢の雨を掻い潜りここまでたどり着いた炎蓮に感心してしまう。
京馬「んで炎蓮さん、こっからどうすんすか?」
炎蓮「まずは城壁にいる賊どもを蹴散らさなければな」
京馬「蹴散らすって、どうやって・・・?」
城壁を登ろうにも梯子も何もないため兵士たちが梯子を持ってくるのを待つのかと疑問に思った時だった。

炎蓮「こうやるに決まってんだろうが」（ガシッ

そう言って炎蓮は京馬の胸ぐらを掴み持ち上げた。

京馬は何をするつもりなのか全く分からなかったが、状況をよく考えていき徐々に炎蓮が何をするのか理解していったと同時に顔が青ざめてしまう。

京馬「ま、まさか・・・!?」

炎蓮「フッ・・・うおおりゃああああ!!!!」

ブォオンッ!!

なんと炎蓮は人間とは思えない力で京馬を城壁の兵目掛けて投げ飛ばしたのだった。

京馬「うおぉぉぉぉぉぉ!!??」

投げられた京馬は一気に城壁の上までたどり着き見事に着地した。

京馬「滅茶苦茶だあの人・・・!!」

炎蓮に対して怒りが込み上げてくるも無事に着地できたことに取り敢えずひと安心した。

が、束の間、

「な、何だぁ!?」
「人が飛んで来やがったぞ!?」
「まさか、孫呉の兵か・・・!?」
京馬「・・・あっ」
城壁にいた黄巾党たちは突然飛ばされた京馬に驚いて各々が武器を手に取り出した。
京馬「ホントになんてことしてくれたんだ、あんのクソババア・・・!!」
戦場に慣れるために何もしなくていいと数日前に言っておいたにも関わらず最前線に自分を送り込んだ炎蓮に京馬は再び怒りが込み上げてきた。
「その首もらったーーー!!」
すると、黄巾党の兵の一人が京馬の首目掛けて剣を振ってきた。
ドガッ!
「ブゥッ!?」
しかし刃が届く前に京馬の拳が顔面を捉えて兵は殴り飛ばされてしまった。
京馬「ワリィが俺は今ムシャクシャしてんだよ・・・!これ以上神経逆撫ですんじゃねぇよぉ!!」
腹わたが煮えくり返っている京馬は完全に喧嘩のスイッチが入っており兵たち目掛けて突っ込んで行った。

ズドンッ！
「ぐはっ!?」
ビシッ！
「がぁっ!?」
ガァンッ！
「んぐっ!?」
殴る、蹴る、頭突きと、ここが戦場であることなど忘れているかのように京馬は次々に敵兵たちを蹴散らしていった。
「な、何なんだコイツ・・・!?」
「化け物じゃねぇか・・・!」
黄巾党たちも京馬の圧倒する姿にたじろんでしまい身体が動かなくなってしまう。
「何ボケッとしてんだ!?敵はたった一人だ!俺たちがやってやる!」
すると奥から他の兵たちを押しのけて数人が京馬に向かって行った。
京馬「チィッ！また増えやがった!こりゃキリがねぇ・・な・・・」
京馬が向かって来る兵たちを見ると言葉が途切れてしまった。
その理由は、

髭「・・・・・・」
チビ「・・・・・・」
デブ「・・・・・・」
京馬「・・・・・・」

『あーーーーーーーー!!??』

そう、京馬がこの世界に来て最初に出会ったあの三人組だったからだ。
京馬と三人組は互いの顔を見て指を指して驚きの声を上げてしまう。
京馬「お前らあん時の！黄巾党だったのかよ!?」
髭「な、何でここにテメェがいやがんだよ!?まさか孫呉の兵だったのか!?」
髭は京馬がここにいることに驚いたと同時に怒りを露にした。
髭「まさかこんなところでテメェに復讐できるとはな！俺たちもツイてるぜ！」
チビ「あん時はよくもやってくれたな！覚悟しやがれ！行けデブ！」
デブ「おう。もう油断しないんだな」

チビは前回と同じようにデブに命令して京馬を倒そうとした。
デブは腰登ろう剣を引き抜いて京馬目掛けて振り下ろした。
ビュンッ　カァンッ
しかし京馬はバックステップで剣を避け、デブの剣は城壁に当たっただけになってしまった。
京馬「遅せぇんだよ、このノロマが」（クイクイ
京馬は人差し指を立てて手前へ動かしてデブを挑発した。
デブ「ぬぅぅぅ！馬鹿にするんじゃねぇんだな！」
挑発に乗ったデブは怒り任せに剣を振り回すも京馬を斬る処か特攻コートに掠りもしなかった。
京馬（スゲェ・・・！どうなってんだ・・・!?自分でも驚く程に冷静だ・・・！）
剣を避けている京馬は内心で自身の身体能力と冷静さに驚いていた。
殺されてしまう恐怖心など全く沸いて来ず、むしろ心に余裕が出来ていた。
粋玲が稽古をつけてくれたおかげか、それとも自分の潜在能力が目覚めたのか、京馬には分からなかった。
デブ「はぁ、はぁ、はぁ・・・」
そうしている内にデブに疲れが見え出して剣の振る速さも段々落ちていった。

京馬（ここだ！）
デブが剣を振りかぶったと同時に京馬は懐へと飛び込み振り上げる体制で身体を大きく捻り右拳を作った。
京馬「食らええ!!」
そして身体を振りかぶりデブの顎目掛けて拳を振り上げた。

ズドオオオオオン!!

『なぁっ!?』
棒立ちになっていた兵たちはデブが殴り飛ばされたことに驚いて声を上げてしまう。
京馬「・・・へ？」
そして京馬もあり得ない光景を見て目が丸くなってしまった。
何故なら殴られたデブが5メートルも上へ宙を舞っていたのだから。
そしてそのまま気絶したデブは、
ドシィィィィン!!

髭・チビ『ギャアアアアア!!』
髭とチビを下敷きにして落ちてきてしまった。
巨漢の身体に押し潰された2人はそのまま気絶してしまった。
京馬（・・・今、何が起きたんだ？）
自分は確かにデブをぶっ飛ばすつもりで思いっきり殴ったのだが、まさか本当にあの巨漢を5メートルも飛ばせるなど今でも信じられなかった。
それに殴った時も全くデブの体重が腕へ掛からずまるで軽いものを殴った感覚だった。
京馬（一体どうなっちまったんだよ俺・・・!?）
人間離れした自身の力に京馬は思わず自分の両手を見てしまう。
「あんな巨漢の男が・・・!?」
「ば、化け物だぁーーー!!」
「逃げろーーー!!」
デブをぶっ飛ばしたことにより、敵兵たちは戦意を失ってしまい城壁から逃げ出し始めた。
しかし次の瞬間、
ザシュ!!

『!!??

突然五人程の敵兵たちが横一戦に斬られて倒れたのだ。

一人は腹を斬られて腸が飛び出し、一人は首を斬られ、一人は上半身と下半身が離れてと、敵兵の五人は瞬く間に絶命してしまった。

京馬「うっ・・・!?」

目の前で人が死ぬ光景を初めて見た京馬は思わず胃の中のものを嘔吐してしまいそうになるも何とか堪えたと同時に改めて認識した。

ここは人がたくさん死んでしまう戦場なのだと。

一体何が起こったのかと再度死体の方を見ると、

炎蓮「よぉ京馬、生きてるか?」

いつの間にか城壁に上っていた炎蓮がいた。

そして彼女の手には血がベットリついている剣が握られており、敵兵たちは炎蓮に斬られたのだと京馬は理解した。

京馬「い、炎蓮、さん・・・!」

炎蓮「よく敵兵を蹴散らしてくれたな、対した奴だお前は」(ワシャワシャ

炎蓮は京馬の闘いぶりを褒めたと同時に頭を強く撫でた。

京馬「・・・・・」

京馬は死体を見た影響で半ば放心状態になってしまっている。
炎蓮「・・・京馬、お前はここで少し待ってろ。後はオレがやる」
京馬の心境を悟った炎蓮は京馬を最前線へ連れて行ったことを少し反省し、黄巾党を蹴散らすために城の内側へと走って行った。
京馬「・・・ハァ」（ストン
暫くして少し心に落ち着きを取り戻した京馬は壁に背もたれしながら座り込んでしまう。
こんなことが日常茶飯事で起きているこの世界で自分はどうなってしまうのだろうと考えて込むのだった。

番長、腹を決めるとのこと

炎蓮と京馬が黄巾党の拠点へ乗り込んでいる頃、城壁の外では雪蓮たちが軍を率いて突撃していた。

「はぁ！」

城壁から放たれる矢の雨を雪蓮は馬を走らせながら剣で防いでいる。

それに続き他の兵たちも矢を避けながら進行していく。

「ふっ！」

祭も同じように馬を走らせ城壁にいる敵兵たちを次々に矢で貫いていく。

流石は弓の名手と呼ばれることもあり、的確に頭を狙っている。

矢の雨を掻い潜りながらようやく城門前にたどり着き兵たちは門を破るべく衝車の準備に取り掛かった。

城壁を見上げている雪蓮は傍にいる冥淋に愚痴を溢してしまう。

「もう！母様ったら1人で突っ走っちゃって！京馬はこれが初陣なのに！」

「過ぎたことは致し方あるまい。それにしても京馬を投げて城壁へ上らせるとは…相変わらず無茶苦茶なお方だ…」

戦に慣れていない京馬を連れて単騎で乗り込んでしまった炎蓮の行動は正直言って褒められたものではない。

そもそも何もしなくてもいいと言った本人がそれを無視しているため呆れて何も言えないのである。

「程普様！衝車の準備が整いました！」

「よし！一気に抉じ開けるわよ！突撃ィ！」

そうこうしていると衝車の準備が終わり粋玲の掛け声と共に兵たちは衝車を押して城門へぶつけた。

激しい衝撃音が鳴り響くも流石に一発では破れなかった。

続けざまに二発三発と衝車をぶつけるも強固な造りなのか一向に破れる様子がなかった。

「中々破れないわね……！」

「炎蓮様が造られた城門ですから…」

「そうなのよね～…」

敵の侵入を容易く許さない造りになっている城門の頑丈さに粋玲はため息をついてしまうも諦めずに打ち破ろうとする。

「もう一度よ！」

「は、はっ……！」
何度やっても破れない城門に兵たちは疲弊してしまうも粋玲の号令で気を取り直し再度衝車をぶつけようとした時だった。
突如城門が内側から開いたのだった。
「えっ？」
突然のことに粋玲が一瞬固まってしまうと、
「なんだお前ら、今ごろ来たのか？あまりにも遅かったから迎えに来てやったぞ」
城門から何もなかったかのように炎蓮が出てきたのであった。
城壁の上にいた敵兵たちを蹴散らした後、内側から門を開けたようである。
その炎蓮の行動に冥淋たちはおろか、味方全員が呆気に取られてしまっている。
しかし雪蓮は怒った様子で炎蓮の元へ詰め寄った。
「母様！勝手なことしないでよ！」
「たわけが！俺たちの城を好き勝手に食い尽くすイナゴ共を蹴散らしてやったまでだ！お前たちが遅すぎるのだ！」
「だからって……あれ？京馬は？」
悪びれる様子もない炎蓮に雪蓮が呆れていると、一緒に突撃した筈の京馬がいないことに気がつく。

「アイツなら…」
　京馬がどこにいるのか炎蓮が言おうとした時だった。
『うわぁぁぁ!?』
『!?』
　城壁へ上がる階段から黄巾党の敵兵たちが転がり落ちてきた。
　敵兵たちは何故かボロボロで起き上がれる様子ではなかった。
「な、何が…?」
「おぉ雪蓮、もう来たのか」
　雪蓮が唖然となっていると階段の上から聞き覚えのある声が聞こえ顔を上げると京馬が下りて来ていた。
　どうやら城壁に残っていた敵兵たちと交戦していたようである。
「京馬！貴方こそ大丈夫だったの!?怪我はない!?」
「いや子供じゃあるまいし…」
　階段を下り終えた京馬に雪蓮が駆け寄り怪我がないか心配するも、京馬は何事もなく返した。
「…その様子だと、心配はねぇみたいだな」
　死体を見て茫然となっていた筈なのにいつも通りの様子の京馬に炎蓮も声を掛ける。

「まぁ、アレっすよ…兎に角もう、大丈夫なんで…」
京馬は死体を見続け無理に慣れようとしたが途中でふっ切れなんとか立ち直ることができたのであった。
「そうか……冥淋！祭！粋玲！何をボサッとしてやがる！門は開いたぞ！京馬は雪蓮と一緒に突撃しろ！」
「は、はい！」
「承知！」
「よし！全軍！突撃せよ！」
炎蓮の掛け声と共に呆気に取られていた粋玲たちは兵たちに号令を出して場内へ突撃していった。
それを見送っている京馬の後ろから雪蓮が優しく肩に手を置いた。
「雪蓮…？」
「無理しなくていいのよ。手、震えてるわよ」
雪蓮に言われて自分の手を見てみると小刻みに震えていた。
いくらふっ切れたとはいえ完全に立ち直ってはいないことを見抜かれてしまい京馬は落ち着かせるべく深く深呼吸をする。
「ふぅ～……悪いな、心配かけて」

「大丈夫よ。言ったでしょ、何かあったら私が守るって」
戦に慣れているのかこんな状況でも励ましてくれている雪蓮に京馬は軽く笑みを浮かべてしまう。
それと同時に手の震えも止まり落ち着きを取り戻したのだった。
「うしっ！んじゃあ行くか！」
「ええ！」
そして炎蓮たちの突撃の遅れを取ってしまった2人はその後を追うべく駆け出すのであった。

◆◆◆◆◆

炎蓮たちに追いつこうと京馬と雪蓮が走っていると、道中には無数の死体が転がり落ちていた。
ある者は首を斬られ、ある者は矢が頭に突き刺さり、またある者は手足を斬られたりと、人間からただの肉塊となり血の水溜もできており、まさに地獄のような光景が広

がっていた。
京馬もこれらを見て顔を歪ませてしまうも足を止めずに辺りを見渡す。
「もしかして、これって炎蓮さんが全部やったのか…」
「母様ならあり得るわ。けど祭たちも負けずに奮闘したみたいだけど」
死体の状況から炎蓮を先頭に黄巾党たちを一掃したと雪蓮が推測した時だった。
「こっちにいたぞ！」
「たった2人だ！取り囲んでしまえ！」
正面から黄巾党の兵たちが武器を持って京馬と雪蓮へ向かって来ていた。
圧倒的に敵の数が多く多勢に無勢とは正にこのこと。
しかし2人は不利な状況にも拘わらず走ることをやめず、それどこか更に加速して黄巾党との距離を縮めていく。
「邪魔よ！」
「そこどけぇ！」
雪蓮は剣を抜刀し敵の胴を斬り裂き、京馬は厚い靴底を敵の顔面にめり込ませた。
そしてそのまま2人は黄巾党と交戦を始める。
「はぁ！」
「ぎゃっ…！」

雪蓮は次々に襲い掛かって来る敵を怯むことなく斬り裂いていく。
剣を巧みに扱う雪蓮の前では敵は小さな悲鳴を上げて絶命するしかなかった。
「うぉらぁ！」
「ぐほぉっ!?」
対して京馬は豪快に拳を振るい敵を殴り飛ばしていっている。
城壁で交戦した影響で身体が温まり更に動きに磨きがかかっている。
すると京馬の視界に雪蓮の後ろから斬り掛かろうとしている敵が映り込んだ。
「雪蓮しゃがめ！」
「！」
咄嗟に叫んだ京馬の声が雪蓮の耳に入り、雪蓮は反射的に身を屈めた。
それと同時に動き出してした京馬は雪蓮の後ろにいた敵目掛けて拳を叩き込んだ。
「んぐぅぁぁぁ!?」
そして敵はそのまま空き家の壁を壊しながら勢いよく殴り飛ばされていった。
「っ!?また…!?」
それを見た京馬は目を見開いてしまう。
確かに勢いよく殴ったが壁を壊す力など持ち合わせている訳がない。
にも拘らず、敵ごと壁を壊してしまった。

先程城壁で巨漢のデブを宙高く殴り飛ばした時のように腕に掛かる負担は軽かった。
人間離れしている自分の力に唖然となっていると後ろから雪蓮の声が聞こえた。
「京馬！ボサッとしないで！」
「！」
ハッと我に返った京馬が振り向くと、既に残りの敵兵たちを斬り捨てた雪蓮がいた。
辺りは死体が転がっており誰もが目を背けたくなる光景が広がっていたが京馬は気にすることなく雪蓮に謝った。
「わりぃ、少し油断してた…」
「もう！戦場じゃ一瞬の油断が命取りなのよ！」
「…あぁ」
「それにしても驚いたわ…！京馬がこんな力を隠してたなんて…！」
そう言いながら雪蓮は壊れた壁でぐったりと倒れている敵を見ながら驚嘆する。
炎蓮とのタイマンから京馬の実力は理解していたつもりだったが、まだ力を隠していると雪蓮は解釈をしてしまう。
「いや、俺にも何が何だか…」
「って感心してる場合じゃないわね！早く母様たちと合流しないと！行くわよ京馬！」
何かおかしいと言おうとするも雪蓮は一刻も早く炎蓮と合流するべく駆け出して

いったのだった。
　自分の人間離れしている力も気になるが雪蓮を見失う訳にもいかないためその後を追うべく駆け出すのであった。

◆◆◆◆◆

　しばらく走っていると孫呉の軍が見えようやく追いつくことができた。
　するとそれに気がついた冥淋が2人を見て安堵の息をついてしまう。
「遅かったじゃないか。やはりそっちにも黄巾党が?」
「ええ、なんとか切り抜けられたわ。そっちは?」
「…見ての通りだ」
　冥淋が争いの声がする中央広場へ顔を向けたため京馬と雪蓮も吊られて見ると、
「うらぁぁぁ!!」
　炎蓮が次々に黄巾党を血祭りに上げている光景が広がっていた。
　たった1人で大勢の相手をしているにも拘らずその勢いは止まらず死体の数が増え

ていく。
前に祭から炎蓮は戦の化身と聞いたことがありピンと来ていなかったが、今の炎蓮を見て京馬は納得してしまう。
「……」
「京馬？どうしたの？」
「いや…今思えば、俺ってとんでもない人と殴り合ったなぁって…」
「あぁ～…」
今の炎蓮を見てあの時の自分は怖いもの知らずだったなと口にしてしまう。
そして炎蓮は粗方敵を斬り終え残りは数える程となっていた。
「ふーっ、ふーっ、ふーっ…」
まだ斬り足りないのか肩で息をしている炎蓮は早く来いと言わんばかりに残りの敵を睨み付けている。
明らかに戦いを楽しんでいる様子で最早誰にも止めることなどできそうにない。
狂気とは正にこのことだろうと思った時だった。
「ま、待ってくれ！」
「降伏する！もう俺たちの負けでいい！」
「だから命だけは…！」

今さらになって生き残った黄巾党たちが武器を捨てて地面に頭を擦り付け降伏を願い出た。
次々に殺される仲間を見て流石に勝てないと理解したのであろうが、京馬は皆殺しにされるだろうと察する。
これ以上は見ていられないと顔を背けた時、想定外のことが起きた。
「……降伏を認める」
「えっ？」
「冥淋、後の始末は任せる」
「はっ！」
なんと炎蓮は彼らの降伏を認め血を振り払い剣を収めて立ち去っていった。
それを見た黄巾党は安堵のあまりにその場に座り込んでしまう。
まだ興奮している様子であったが、まさか降伏を認めるとは思わず京馬は唖然となってしまう。
「この戦、炎蓮様の勝利ね」
「うむ。もの共！勝鬨を挙げよ！」
『うおおおおお!!』
戦の勝利が確定すると孫呉の兵たちは勝利を喜ばんとするばかりに一斉に声を上げ

る。

未だに唖然となっている京馬に雪蓮が声を掛ける。

「京馬、大丈夫？」

「あぁ…にしても驚いたな。まさか炎蓮が降伏を認めるなんて」

「相手が戦意を失ってしまったから、熱が冷めちゃったのよ」

これには雪蓮も予想外だったらしく立ち去っていく炎蓮の背中を見ている。

あんなに狂気に満ちていても冷静さは失っていない炎蓮に京馬が感心していると、急に膝から崩れ落ちその場に座り込んでしまう。

「京馬…!?」

「あ、あれ…？」

突然のことに京馬は立ち上がろうとするも何故か足に力が入らず立ち上がることができなかった。

「どうしたの？」

「分かんねぇ…足に力が…」

「…きっと疲れたのよ。今日は色々ありすぎたから身体に限界が来ちゃったみたいね」

初めての戦に放り出され人の死ぬ光景を目の当たりにした影響で無意識に身体が言うことを聞かなくなったようである。

「取り敢えず陣地へ戻りましょ」
「あ、あぁ…」
そう言って雪蓮は京馬の腕を自分の肩に回しもう片方の手を腰に沿えて京馬を運び出す。
足をズルズルと引き摺られながら京馬は雪蓮と今日のことについて話し始める。
「初陣を終えた感想はどう？」
「…正直言って、混乱したな。俺のいた世界はそこまで治安も悪くなかったし、人が死ぬのなんて初めて見たしよ」
「そう…」
「けど、１つ分かったことがある」
「？」
「俺には、殺される覚悟はあるが、殺す度胸がねぇ…」
黄巾党と対峙した時は殺されると実感した上で戦うことができていたが、自分が殺そうとすると心のどこかでブレーキが掛かってしまいどうしても命を奪うことができなかった。
つまり自分には人間を殺すことはできないということ。
「…それでいいのよ。京馬は京馬なんだから、私たちの真似をしなくていいの」

「…ありがとな」

雪蓮から励まされ京馬は笑顔になった。

こうして京馬は炎蓮たちと共に初陣を果たし黄巾党を退けたのであった。

番長、親衛隊と組手をするとのこと

黄巾党と戦を繰り広げ数日。
孫呉は普段と変わらない毎日を送っていた。
また黄巾党がいつ攻めてくるか分からない状況であるが炎蓮を始め雪蓮たちも特に警戒している素振りなど見せなかった。
「ん～……」
そんな状況の中、京馬は自室の寝床の上で胡座をかいて考え事をしていた。
それは自分の力についてだった。
黄巾党と対峙した時、自分でもあり得ない力を発して人間を吹き飛ばしたため訳が分からなかった。
あれから自分の力について色々試しているものの、あの時に出した力を出すことができずに悩んでいた。
「あの時のパンチは腕に掛かる負担が小さかった…何たったんだ…？」
考えても考えても答えは出ず完全に行き詰まっている。
炎蓮や雪蓮に聞いても分からないと返されてしまいどうしたものかと悩んでいると

咄嗟に立ち上がった。
「考えても仕方ねぇ。訓練場に行ってみるか」

◆◆◆◆◆

部屋を出て訓練場に向かいながら京馬はふとあることを思った。
「そういや訓練場に行くのって炎蓮さんとタイマンして以来だな」
京馬は普段から街外れの森で特訓をしていたため訓練場に赴くのは久しぶりである。
訓練場には人を模した丸太などがあるため対象となるものがあればなにかしら掴めるかもしれないと思ったのである。
そうこうしていると訓練場に到着したが、既に先客がいた。
「あれ？祭さん？」
「ん？おぉ京馬か」
そこには祭がおり、その正面には数十人の女子たちが四列になって整列しており現れた京馬に注目した。

一体何をしているのだろうと思い京馬は祭の元へ歩いていった。
「何してんすか？」
「これか？親衛隊の訓練をしておるのじゃ」
「親衛隊？」
君主である炎蓮の親衛隊があるとは聞いていたが全員が女子のため少しだけ驚いてしまう。
この世界は女尊男卑という考え方はないがどうやら優秀な人材は女性に偏っているようである。
「女性ばっかりなんすね…」
「うむ。女の方が身軽じゃからのう」
「なるほど…」
祭の言うことも最もだなと京馬が納得すると、祭があることを提案した。
「そうじゃ。折角の機会だから組手でもしてみるか？」
「は？組み手を？」
突然の祭の提案に京馬はもちろんのこと、親衛隊の面々もざわついてしまう。
そんな親衛隊に祭は説明を始める。
「主らはまだ各々としか組手をしておらぬじゃろ。たまには違う者とするのもいい経験

になる。それにこの小僧は文台様と正面から殴り合う実力と度胸を兼ね備えておるから強者じゃぞ」

祭から京馬のことを聞かされた親衛隊は更にざわついてしまう。

炎蓮の実力は親衛隊の誰もが知っているためそんな炎蓮と正面からやり合った京馬に再び注目してしまう。

「それで京馬よ、どうする？」

半ば強引に進めたため一応了承は得ようと祭が京馬に確認を取ると、

「…分かりました。やりましょう組手」

京馬は親衛隊と組手をすることを決めるのであった。

◆◆◆◆◆

訓練場の石畳にて、そこには準備体操をしている京馬と親衛隊の1人が向かい合っており残りの親衛隊の面々は石畳を取り囲むように規則正しく並んでいた。

いきなり組手と言われて最初は京馬も戸惑っていたものの、よくよく考えればあの時

の力を引き出すには絶好の機会ではないかと思い組手をすることを決めたのだった。
京馬の準備体操が終わり目の前の親衛隊と対峙すると間に祭が立った。
「ではこれより組手を始める。お互い相手を確実に仕留めるつもりで望むのじゃぞ」
「はいっ！」
「うすっ」
祭の審判の元、いよいよ組手が始まろうとした。
「始め！」
そして合図と共に親衛隊は京馬へ駆け出した。
動きが思ったより早かったため京馬は一瞬遅れるも繰り出される拳を右腕で防いだ。
どうやら親衛隊は初手で決めるようであったが防がれたことに驚いてしまい隙ができてしまった。
「はぁ！」
躊躇している隙を逃すまいと京馬は拳を親衛隊の腹目掛けて叩き込んだ。
「うっ!?」
あまりにも重い一撃に親衛隊はその場に膝をついてしまい京馬の勝ちとなった。
一方京馬はあの時の力を出せなかったことに拳を開いたり閉じたりして確認するもハッと我に返り親衛隊へ駆け寄った。

「わりぃ、大丈夫か？」
「けほけほっ…！大丈夫、です…！ありがとうございました…！」
咳き込みながらも立ち上がり組手をしてくれた京馬に頭を下げて囲んでいる親衛隊の中へ歩いていった。
流石は祭が鍛えているだけあって動きも早く殴られても直ぐに動けるタフネスを兼ね備えておる親衛隊に感心してしまう。
すると次の親衛隊の１人が出て来て京馬と向かい合い組手を始めるのであった。

◆◆◆◆◆

それから京馬１人ずつ交代で親衛隊と組手を行い、遂に最後の１人となった。
１人１人が黄巾党の連中と比べ物にならない程動きに磨きがあり京馬も少々手こずってしまうものの、なんと２９人抜きを達成してしまったのだった。
「驚いたのう…！まさかここまでやるとは…！」
これには流石の祭も驚いてしまい親衛隊も一回も勝てないことに唖然となってしま

う。

「はぁ、はぁ、はぁ…ふぅ」

一方京馬は大勢と組手をしたため汗をかいており疲れが目に見えていた。

息を整えながらも最後の1人と組手をしなければと思い額の汗を拭う。

結局あの時の力は出せずにいるがどちらにしろいい経験となっている。

そしてついに親衛隊の最後の1人が京馬の前に立った。

「よろしくお願いします！」

現れたのは茶髪でメンチを切っているのではないかと誤解してしまう程の目付きが鋭い女子だった。

「アンタで最後か…」

「呂蒙と申します！字は子明です！」

女子は呂蒙と名乗り素早く身構えた。

他の親衛隊とは違い今にも飛びかかって来そうな勢いが出ているため京馬は手強そうだと察しながら構えた。

ジリジリと睨み合っていると祭が合図を出した。

「始め！」

「せいやぁっ！」

それと同時に颯爽と飛び出したのは呂蒙。
一気に京馬の懐へ飛び込み拳を繰り出す。
「うぉぉっ!?」
いきなり距離を詰められ反応が遅れるも京馬は反射的に呂蒙の拳を捌く。
このままでは戦いづらいため京馬はバックステップで距離を取ろうとするも空かさず呂蒙が攻めてくる。
「逃がしません!」
「コイツ…!」
素早く鋭い拳や蹴りを辛うじて捌けてはいるものの今までの相手とは桁違いに強く徐々に押されてしまう。
京馬と呂蒙の激しい戦いを察含め親衛隊も固唾を呑んで見ている中、ついに京馬が動いた。
(ここだ!)
「なっ!?」
攻撃を捌きながら相手の癖や間合いを見抜く自分の戦い方で呂蒙の回し蹴りを予測しタイミングを合わせて左手で受け止めた。
呂蒙は呆気に取られるもすぐに抜け出そうとするが、京馬の握る力が強すぎず中々抜

け出せない。
「悪いな！」
そしてそのまま京馬は右拳を振り上げ呂蒙のおでこへ振り下ろした。
しかし次の瞬間だった。
そのまま振り下ろした拳は呂蒙を石畳へ叩きつけると、石畳に大きな亀裂ができてしまった。
これには親衛隊はおろか祭ですら唖然となってしまう。
「またこの力……！あっ!?しまった！」
またしてもあの時の力が出たことに京馬も唖然となるも我に帰り拳をまともに食らってしまった呂蒙へ視線を向ける。
呂蒙は気を失っているものの、額から少しの血が出ているだけでそれ以外で特に大きな怪我は見つからなかった。
「呂蒙！大丈夫か!?」
「動かすな京馬！すぐに医務室へ運ぶのじゃ！」
「は、はいっ！」
京馬は必死に呂蒙に呼び掛けると祭が速やかに親衛隊に命令を出して呂蒙は医務室へと運ばれていった。

そして今日の親衛隊の訓練はお開きとなり訓練場には京馬と祭の２人きりとなった。
「京馬よ。確かに儂は本気でやれとは言ったが、流石にやり過ぎじゃ」
「…返す言葉もないっす」
まさかここまでやるとは思っていなかった祭は京馬を優しく叱りつける。
そして京馬も自分の底知れない実力に呆然となりながらもやり過ぎたことを反省するのだった。

◆◆◆◆◆

親衛隊との組手があった翌日のこと。
今日の京馬は粋玲の仕事の手伝いということで街の警羅に赴いていた。
まだ政務などの書物類の仕事を任されていないためほぼ毎日警羅の仕事をこなしている現状である。
「今んところトラブルなしか…」
特に喧嘩や窃盗も起きていないため今のところは問題はない。

相変わらず賑わっている街を見渡していると、一件の本屋が目に止まった。
何も変哲のない本屋であるが、外に陳列してある本を立ち読みしている人物に見覚えがあった。
「あれは…呂蒙か」
それは昨日の組手で手合わせした呂蒙だった。
呂蒙の額には湿布が貼られており昨日の怪我なのだろうと推測した。
彼女は本を手に取りやや顔を近づけて読んでいた。
ここは声を掛けるべきだと思った京馬は呂蒙の後ろから声を掛ける。
「よう呂蒙」
「？」
声を掛けられた呂蒙は本から顔を離して振り向き京馬と向かい合った。
「……」
しかし、呂蒙の目付きは鋭くなりその顔のまま京馬へと近づく。
（…やっぱ昨日のこと怒ってるな）
思い切り殴られたのだから当然だと納得してしまう京馬。
今ここで殴られても文句は言えないと思った時だった。
「……はっ!?ゆ、雪村様!?」

「ん？」
覗き込むように睨んでいた呂蒙は目を見開き慌てて距離を置いて拱手をする。
昨日まで真面目で堅物そうなイメージだったというのに今はあわあわと動揺している呂蒙に京馬は呆然となってしまう。
「な、何故こちらに…？」
「あ、あぁ。警羅の途中でな、偶然お前を見かけたから声を掛けただけだ」
「そ、そうでしたか…」
「……その、なんだ…昨日は悪かったな。少しやり過ぎた」
他愛もない会話をしながら京馬は昨日の組手のことを謝った。
「お気になさらないで下さい！私の実力不足が原因なのですから！」
しかし呂蒙は昨日のことを自分が倒されたことが悪いと言い頭を下げようとする京馬を慌てて止める。
こうして話してみると結構話しやすいため人は見かけに寄らないと京馬は思った。
「……なぁ、昼は食ったのか？」
「えっ？まだですけど…」
「このまま何もしないっていうのは俺としては納得できねぇ。奢らせてくれ」
「ええ!?ですからお気にしないでくださいと…！」

「いいから来いって」
「ゆ、雪村様!?」
そして京馬は半ば強引に押しきり、呂蒙の手を取り茜の店へ向かうのだった。

◆◆◆◆◆

しばらくして、茜の店に到着した京馬と呂蒙。
２人は席に座り机の上の料理を食べていた。
「すみませんご馳走していただいて…」
「謝るのは俺の方さ。気にすんなよ」
「お待たせしました～こちらゴマ団子になりまーす」
机の上の料理をようやく食べ終えた時、最後に注文していたゴマ団子を茜が運んできた。
「わぁ…！」
目の前に置かれたゴマ団子を見た呂蒙は好物なのか目を輝かせてしまう。

「分かりやすいですね」
「あんなに気持ちを顔に出せるヤツは滅多にいねぇよ」
それを見た京馬と茜はコソコソと話しながらクスクスと笑ってしまう。
すると京馬はゴマ団子を堪能している呂蒙にあることを聞いた。
「なぁ呂蒙。お前ってさ、もしかして目が悪いのか？」
「ッ…！ど、どうしたんですか急に？」
口に入れていたゴマ団子を呑み込んだ呂蒙は思わず首を傾げてしまう。
「いや…さっき本読んでた時、結構目が近かったからな」
先ほど本屋で立ち読みをしていた呂蒙は顔をかなり近づけていた。
更に声を掛けて京馬の方を振り向いた時もすぐに気がつかなかったため近眼なのではと推測したのである。
「そのような自覚はありませんが…」
「…右の３つ目の席の机、見えるか？」
「え？」
京馬に言われた呂蒙は右の３つ隣の席を見ると、１人の男性が食事をしていた。
「あの席の餃子の数、分かるか？」
「…馬鹿にしないで下さい。５つです」

目が悪いのか確かめるためにこんなことをさせるのだろうと呂蒙は思うも、このくらい見えると京馬にムスッとしながら自信満々に答える。

しかし、

「いや、餃子は3つしかないよ」

「えっ？」

同じ位置に立っていた茜は容易く答え呂蒙は呆然となってしまう。

茜の言うとおり、餃子の数は3つである。

そんなワケないと呂蒙は目を細くしながら見ようとするも京馬に言われる。

「認めろ。お前は目が悪い」

「うぅ～…」

自信満々に答えたというのに間違いだったことに呂蒙は恥ずかしさのあまり顔を赤くしてしまう。

京馬もここまで酷いとは思っておらず苦笑いを浮かべる。

「そんなに目が悪いなら眼鏡を買ったらどうだ？それだと日常生活も苦労するだろ」

「…それは分かってますけど、眼鏡をつけると壊してしまいそうでして」

「そっか、目を怪我したら大変だよね」

どうやら呂蒙自身も自覚はあったようだが、訓練に限らず実戦で眼鏡を壊してしまう

と彼女なりに考えていたようである。
「だけどな、あんな読み方するのは返って目を悪くするだけだぞ……つーかあの時何の本を読んでたんだ？」
「兵法の本です」
「兵法？そんなのに興味があるのか？」
親衛隊だから拳法関連の本かと思ったが軍司関連の兵法の本を読んでいたことに京馬は少し驚く。
「はい。親衛隊に入った頃はまったくと言っていい程、戦果を残せなかったのですが、戦略を立てようと兵法の本を読んでいるウチに興味を持ったのです」
「成る程…」
最初は戦略を身につけるために兵法を読んでいた筈が、気がつけば兵法に興味を持ったことに京馬と茜は感心してしまう。
すると茜は呂蒙にあることを提案した。
「ねぇ呂蒙さん。兵法に興味があるなら軍司にでもなってみたら？」
「へっ？軍司、ですか？」
突然の提案に呂蒙は目を丸くしてしまう。
兵法を学べば知略が育むことができ、戦況を容易に把握して打開する策も見出だせる

ことができる。
　兵法に興味がある呂蒙ならばすぐに成長できると茜は思ったからこそ軍司を提案したのである。
「それに軍司なら眼鏡を壊すこともないから大丈夫じゃないかな」
「きゅ、急にそんなこと言われましても…」
「やっぱり親衛隊が大事なのか？」
「いえ、別に親衛隊にこだわりがあるワケでは…」
　戸惑っている呂蒙を見て軍司も満更でもないと思っていることを京馬は見抜く。
　しかしそれは本人で決めることであるため無理に勧めようとはしない。
　そこで京馬は呂蒙に助言を授けた。
「軍司になるか親衛隊を続けるか決めるのは呂蒙だ。俺は何も言わねぇ…けど、人生ってのは一度きりだ。いろんなことをやってみるのも悪くねぇと思うぞ」
　人生は一度きり。
　生きている内はいろんなことができる。
　だからこそ、人生は面白いのだと京馬なりの考えを口にしたのだった。
「いろんなことを…」
「京馬さんにしてはいいこと言いますね」

「あれ？今馬鹿にされたような…」

◆◆◆◆◆

しばらくして、茜の店を後にした京馬と呂蒙は城門の前に立って話をしていた。
「今日は本当にありがとうございました。ご馳走していただきまして」
「言ったろ？昨日の詫びだって」
呂蒙は今日は非番だったためこの後は街にある家に帰るようである。
そして軽く話を済ませた京馬は城内へ入ろうとする。
「んじゃまたな」
「……雪村様！」
「ん？」
すると呂蒙に声を掛けられ京馬は足を止めて振り向く。
そして呂蒙は勇気を振り絞るように口を開いた。
「私…色々なことを試してみようと思います！もしかしたら違う道を見つけられるかも

しれませんから！」

どうやら茜の店で京馬に言われたことを考えて親衛隊以外の様々なことに挑戦することを決心したようである。

それを聞いた京馬は驚くことなくフッと笑う。

「そうか…それでいいと思うぞ。もし軍司になった時は、とびっきりの策を頼む」

「はい！」

そして呂蒙の笑顔を見た京馬はようやく場内へと入っていくのであった。